

天国に一番近い島

Libri animae ex Bliss

自分がありとあらゆる病にかかっていると判断したセフィロス氏は(ただし女中ひざを除く)、クラウドをともなうて、古代種の伝説の眠る南の島へ夏の休暇に出かけた。降り注ぐ太陽、美しい海、楽園のような島。ところが神羅軍陸軍中佐が遺体で見つかり、その息子も行方不明だという。優れた指揮官だった中佐には殺される理由が見当たらず、捜査は難航、これはと思った容疑者も当てが外れてばかり。中佐はなぜ殺されねばならなかったか？ セフィロス氏は相棒のフェア氏を巻き添えにして、いやいや調査に乗り出したのだが……。

主な登場人物

- セフィロス……………ソルジャー部隊総司令官閣下
ザックス・フェア……………ソルジャー部隊副司令官
クラウド・ストライフ……………ご存じつんつん頭
プレジデント神羅……………神羅カンパニー社長
エルドウィン・ノリス……………神羅都市開発機構エフロギア島支部部長
イオルゴス・ミロス……………庭師
マリア・ミロス……………その妻、ハウスキーパー
ニコラオス氏……………運転手
ジョーゼフ・モロー……………陸軍中佐、砲兵連隊長
ジェレミー・モロー……………ジョーゼフ・モローの息子
デライラ・モロー……………ジョーゼフ・モローの妻
スタブロス・シシニス……………灯台守
ヤニス・ファノラキス……………憲兵隊長

ダン・マルキール……………予審判事

ルシル・ハーマイン……………神羅古代種研究所所長、古代種言語の第一人者

ローランド・スナガ……………神羅古代種研究所科学部門主任

フェリックス・ニューマン……………神羅古代種研究所スナガ研究室の研究員

ゴドフリー・ニューマン……………フェリックスの父

ソフィア・フラック……………製薬会社「クレメシアス製薬」の事務員

ルビー・ラツセル……………クレメシアス製薬元社員

エマ・ジョーンズ……………雑貨店「エルラガド」店長

イザベラ・バシヤ……………デライラ・モローの幼なじみ

エレナ・バシヤ……………イザベラ・バシヤの娘

オリヴィア・ミツチエル……………ジェレミー・モローの彼女

カルノスキ……………スラムの斡旋業者

コントス氏……………造船所経営者

マリオス……………コントス氏の息子

レオン（パントレオン）……………コントス氏の息子
ペトロス……………造船所の従業員
ポリーナ……………ペトロスの妹
ディオメデス医師……………島の開業医
カルファス大尉……………憲兵隊員
ガラニス巡査……………憲兵隊員
トミー・ブラウン……………アパートの管理人
ナディア・ヤツフェ……………サービス業従事者
アンドレア・フォトス……………ホテル・ネクタルの給仕係
オシアス・マティス……………ホテル・ネクタルのボーイ

天国に一番近い島

Libri animae ex Bliss

目次

11	製薬会社の醜聞……………	247
10	デライラ・モロー夫人……………	227
9	ダフネとコリーヌの証言……………	200
8	プレートの上のフェア氏……………	187
7	研究島へ……………	171
6	プレートの下 <small>の</small> フェア氏……………	152
5	本社ビルのフェア氏……………	136
4	文学的な死体……………	77
3	ルシル・ハーマイン教授……………	55
2	天国に一番近い島……………	24
1	病めるセフィロス氏……………	11

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
アンドレア・フォトスの証言………	ナディア・ヤツフェ嬢………	ブラウン氏の証言………	デイオメデス医師………	シシニス元一等兵………	ニューマン家………	エレナ・バシャ………	教師と生徒の証言………	カツプルの証言………	つむじ曲がりのマリオス………	ノリス氏の証言………	カルノスキとルビー・ラツセル………	フェリックス・ニューマン………
490	480	457	446	436	418	406	381	373	354	332	312	280

33	32	31	30	29	28	27	26	25
ボートの三人男	疑問と小さな奇跡	水竜	犯人の証言	男と女の証言	岩場での証言	記憶の迷宮	金曜の夜のフェア氏	オシアス・マティスの証言
663	626	607	594	575	543	528	511	496

天国に一番近い島

作者の言葉

これはサンプルです。目次や登場人物等はいじらず載せてありますので、目
安程度に見てください。

いじっているうちにノンブルがどっかいつてしまったので、このサンプルには
入っていないのですが、本の方にはちゃんと入りますのでご安心ください。

なにしろ九百枚もあるので、平仄が合っていないとか日付を間違えてるとか間違い
が散見されると思います。ひとりで発見するのは限界を感じるので、サンプル部分に
なにか見つけたら教えてください。

〇〇〇三年夏の話です。一ギル＝一円、世界各地の時差はないものとして読んでく
ださい。科学技術も現代と同程度まで発達しているものとします。

1 病めるセフィロス氏

七月二十日 金曜日

やはりそうだ。セフィロスは事典を閉じ、うなずいた。この医学事典によると、セフィロスは第一に神経衰弱にかかっており、そのせいでありとあらゆる病を引き起こす可能性があり、このままいくと遠からずめまい、耳鳴り、頭痛、食欲不振、消化不良、倦怠感、無気力等々に悩まされることになるのだ。そういえばどうも目の奥がチカチカしている気がするし、頭痛が暗い雨雲のごとくに遠くからせまってくる気配がし、倦怠感、無気力、原因不明の疲労などはずでにかなりの程度進行している。

「要するに」

と彼は執務室を出て早足で歩きながら副官のザックス・フェア氏に云ったのであるが、

「おれは早急に休暇を要するんだ」

「うん、おれ知ってた、それ」

とフェア氏はほがらかに云った。

「いいのよ、気にしなくて。あんた最近すごく忙しかったもんね。おれが十働いてたとするとね、あんたはまあ三十か、五十は働いたね。そうすつとハイデッカーのやつは零コンマ一くらいだろうね。いいのいいの、気にしなくて。どーんとお休みしなさいよ。一ヶ月くらい。あんた休みたまってんじやない？ あんたの休暇が年間何日あんのか知らないけど。そんな規定ある？ っていうかあんた契約書とかあんの？ おれは一応あるんだけど、毎回読んでないって云つたら、こないだ怒られちゃった、女の子に。だめでしょ、ってその子云うの。だって、どんな契約させられるかわかったもんじゃないじやない、って云うのね。病気になつても休ませてもらえないかもしれないし、いつでも好きなきときに首切れるって書いてあるかもしれないし、残業代も出ないかもしれないじやない、って。で、おれ、そっかあつて思ったわけ。だから家じゅうひつかき回して契約書のコピー探したんだけど、ないのよねえ。あれどうにかしてもう一回手に入れる方法ってあると思う？」

フェア氏は鳥のようにさえずった。そうこうしているあいだに彼らは神羅ビルを出てしまい、ザックスは左に曲がり、セフィロスは右に曲がらねばならなかった。

「いいのいいの、ほんと、おれ実はひとりのほうがやる気であるタイプだから。あんたが邪魔だつ

つってんじやないのよ。すぐなるはやで戻ってほしいんだけど、でも別にいいのよって話。クラちゃんによろしく」

ザックス・フェア氏はなぜセフィロスがこれからクラウドを探しに行くことを知っていたのか？ おそらく、ことセフィロスに関するかぎり、フェア氏にわからないことなどないのだろう。

最近は何の回るような忙しさだった。神羅カンパニーが新しく「協力関係」に入ることになった功した北方の小国家……というより部族連合のようなものだったが……は、長年頑固に神羅カンパニーと魔晄エネルギーに反対を続けてきた誇り高き民族のひとつだった。ウータイにおいてと同様、この小国家ともならみ合いが続いてきたが、数年前、長年民族を精神的にまとめてきた指導者が死亡してから、にわかの様相が変わってきた。国は長年の抗争で疲弊しており、人々は精神的独立を保つ気概を失いつつあった。若い世代は魔晄エネルギーのもたらす利便性と通信ネットワーク上に転がるコンテンツの魅力に勝てなかった。こうなると、神羅が手を下す必要はほとんどなかった……彼らは内部分裂を起こし、軍部の若い世代がクーデターに成功した。年寄りどもは力づくで退場させられ、魔晄炉建設が合意された。セフィロスは旧勢力の残党処理につきあった。陰鬱な仕事だった。

セフィロスはそもそもはじめから、このためには働きたくないと云っていた。こちらがなにをしてもしなくても彼らはどうせ潰れる。なぜソルジャー部隊が行く必要があるだろうか。た

が上層部は神羅カンパニーの威光を示すありとあらゆる機会を決して逃そうとはしなかった。セフィロスはへそを曲げて得意の出社拒否をはじめた。ハイデッカーやいろんな連中ががなり立てたが彼は頑固に出ていくことを拒んだ。それでとうとうプレジデントが出てきた。手紙をよくし、電話をかけてきて、どうか話をさせてくれと云った。セフィロスはそれでもしばらく頑張ったが、プレジデントは食い下がった。そしてある日、彼らは本社ビルの社長室で、ふたりきりでこんな話をした。

「これが終わったら、あとはなにをしてくれてもいい、頼むよ……」

プレジデントは葉巻の端を切り落としながら、懇願する口調で云った。

「ずいぶん長い戦いだったが、ようやく終わりが見えかけているんだ……飢餓と貧困と迷妄とおどましき生産性の低さからの脱却、旧世界からの脱却だ……」

セフィロスはちらりとプレジデントの顔に目をやった。プレジデント神羅は、これまで多くの場面でこの「旧世界からの脱却」というキーワードについて語ってきた。チョコボの脚が速さの限界であった世界、牛が労働力の象徴であり、人民の九割が食うために土地にしがみついて労働していた世界、人間に真の自由というものがなく、どのような強大な権力も思想も農耕社会の生産力の限界の前に膝を屈していた世界。有史以来、この世界では常にエネルギーや燃料をめぐる争いが絶えることがなかった。この星は資源に乏しく、地下に豊富に埋蔵されているというエネルギー資源をとり出す技術をもたなかった。半世紀ほど前まで主力の燃料であつ

た石炭の埋蔵量はたかが知れていて、その枯渇が誰からともなく叫ばれるようになると、世界は恐慌状態に陥った……そして戦争が起きた。ある国は炭鉱を持つ隣国を併合しようとし、森林地帯を我が物にしようとして徒党を組んで戦争をしかける国があり、混乱に乗じて領土を拡大しようとする国があった……神羅製作所は得意の武器製造でこの世界規模の戦争を背景に富を蓄え、魔晄エネルギーの発見と採掘技術の開発で一躍世界のトップに躍り出た企業である。

そしてその現社長であるプレジデントは、魔晄エネルギーによる人類の繁栄を疑っていない。人類は史上はじめて自然からの独立を果たそうとしているのである。母なる大地から、父なる神から自立しようとしているのである。人類よおのれの足で立て。そして無限のエネルギーに満ちた世界の中で、いまこそ生きるために生きることをやめ、明日の食料と労働とに怯えることをやめて、自由を謳歌し、生命を享受するのだ。

「この戦いが終われば……いいかね……それはすなわち人類の暗黒時代の終わりなのだよ……労働時間は短縮され、食料は増えるだろう。母親はたわけたまじないや祈祷で子どもを病を治そうとするのをやめるだろう。みずからの運命を神に帰することをやめ、人類は自分が人間であるということが、そしてそれがどういう意味を持つのがわかるだろう。彼らは土地の奴隷でなく支配者になるだろう……そういう世界を、きみはそれでもやはり否というのかね。水を汲みに行くのに半日かかり、一日の大半は食料を手に入れるために終わってしまうような世界がすばらしいと云うかね。そんな世界で、人はいったいどんな崇高な思想を抱くのかね……」

プレジデントは灰色がかつた青い目をセフィロスに向け、微笑んだ。

「いやいや、わしはきみと議論をするつもりはないんだ。いまはそんなときではない。きみがわしの考えに頑固に反対しているのは知っている。きみとわしは真逆の人間像を持っているからだ。きみは人間の子どものような善良さを信頼している。わしは人間の怠惰でものぐさな面を信頼している……」

プレジデントはまた微笑んだ。それはほとんど相手をからかうようだった。

「きみの世界では、人間は神を拜むだろう。嘆きながらも非力な運命を甘受し、魔法によって病を癒し、火を讃え、星を導き手とするだろう。わしの世界では、そうしたものはなにもいらない……人間は機械に仕事を任せ、なにも知らずに安楽に生きるのだ……飢えも渴きもなく、痛みも不安もない……」

プレジデントの老いてきた目に、瞬時、異様な光が走った。この男が神羅製作所の正当な跡継ぎではなく、妾腹の子であることを知る者は少ない。彼の子ども時代を知っている者はほとんどいない。貧困と多産、暴力、絶えざる不安となりあわせの無気力のなかで、この男が人生を開始したことを、いったい誰が想像できるだろう。そしてある日突然に、この男は神羅製作所の後継ぎとして表舞台に登場した。そのあたりの事情を知る者はもはやほとんど残っていない。過去の重苦しい沈黙に耐えかねて、この男はそうしたことをセフィロスにほめかしたのだろうか？ 自分がなぜ、そうした打ち明け話を知るに至ったのか、セフィロスにはわから

ないし、あまり考えもしない。ただプレジデントはいつからかセフィロスの前で言葉の端々にそうしたことをにじませるようになり、セフィロスは受け入れたというだけのことだ。

「こんなことはわかっているだろうが、きみを押さえついたり従わせたりするのは本来わしのやりたいことではないんだ。だがいまはわしの時なのだよ……もうしばらく辛抱して、わしの時が満ちるのを見届けてくれたまえ。手を貸してやったものを打ち壊す……これ以上に愉快なことがあるかね？ それに、自分が生涯をかけたものを打ち壊されるのを目の当たりにすることもまた、偉大な人間の特権であることをわしは知っているよ……」

こんなことを、彼は自分の息子には云つたためしがないはずだった。あの残忍で自己顕示欲にまみれた息子に対して、言葉を尽くして説得しようなどと、この男は思ったことがあるだろうか。帝国とはいつても、人間が一代かぎりのものであるゆえに本質的に一代かぎりのものなのだと、この男は歴史から学んだのだろうか。セフィロスは息子ではなく、後継者ではない。自分の後継者でなく破壊者に愛情をもつということが、酔狂なことなのか偉大なことなのか、セフィロスにはわからない。

ともかくも、結局セフィロスはプレジデントの云いぶんに従い、手を貸した。そうして仕事をやり終えた。だから好きにする権利があるはずだった。常にえびりくさつていたいハイデッカーのやつも、プレジデントには頭が上がらなかった。彼は自分が無能とみなされていることを、ほんとうはとつくに知っているだろう。彼にとつてもつとも我慢ならないのは、セフィロ

スの次のひとことである……」プレジデントには話を通しておいた。これがハイデツカーを怒りと屈辱のとりこにするのだ。そしてセフィロスはそれをハイデツカーに云ってやるのが好きだった。そのことを考えるだけで、セフィロスはにんまりした。昨夜それをクラウドに見つかってしまい、クラウドはめずらしがって興奮した。セフィロスがなにを考えていたか打ち明けるとさらに興奮して、できることならその場に居合わせたいものと云って、くやしがつた。

「あとでハイデツカーのやつから電話くらいくるかもしれないな」

セフィロスは非常に機嫌がよかった。

「そのときはおまえが電話に出て、猫なで声でおれが嗜眠性脳炎にかかっていると云ってくればいい」

「しみんせーのーえんってなに」

そこでセフィロスは医学事典を持ち出して、要するにずっと眠ってしまう病気だと説明してやった。クラウドが発音の練習をするというので、ふたりして何度か発音した。しまいには、クラウドはまるで医学部生のようになめらかに発音できるようになったという自信をもった。

「おれ、ものすごくすました声で云ってやるよ。母さんが聞いたっておれだってわかんないよ
うな声でさ」

「そうだな。おまえがああ男に対する積年の憎悪を抑えて罵詈雑言を持ち出さなければ、たぶ
んばれないだろう」

とはいえクラウド・ストライフにそんなことができるかどうかは、大いに疑問だった。彼はセフィロスのありとあらゆる疲労や心痛はみんなハイデッカーのせいであると思っていたし、セフィロスのように顔色ひとつ変えずに皮肉を連発するタイプの子ではない。すぐに怒りに我を忘れるし、落ちこむときはこの世の終わりが来たかのように徹底して落ちこむ。そしてそれでいいのだ。

クラウドが詰めている兵站部第二八部隊は、別に隔離されているというのではないが、なかだの部署からも、部隊からも離れた敷地の一番端に居を構えていた。兵站部第二八部隊は旧神羅製作所の古参社員と、ひどく変わり者でどの部隊でもやっていけそうにない、というよりこの星のほかのどの場所でもやっていけそうにない兵士どもとで構成されていた。兵站部第二八部隊の仕事は、主要な構成員が旧神羅製作所の古参社員たちであることからわかるように、要するに武器や魔晄を燃料とする乗り物類の整備なのであったが、新製品の開発や管理という花形の仕事がスカーレット率いる武器開発部門に移ってしまったいま、この第二八部隊に残っているのは、時代の潮流を読めず社内での政治的趨勢を読めずに乗り遅れた者か、あるいは意図的に乗り遅れた者であって、おそろしく頑固で融通のきかない職人か、単に仕事ができれば幸せな、うだつの上がない人間かであった。

往々にしてこうした人々がその所属集団の良心を担う存在であることは事実だが、この兵站

部第二八部隊の場合、良心を担うというには皆少々個性的に過ぎるところがあり、その下で働いている者たちも、個性の塊、というより社会性の欠如した人間ばかりだった。軍人に必須の統率、連携、うるわしい忠誠心ならびに同胞愛といったものはかけらも持ちあわせておらず、仕事のあいだじゅう酒瓶を手放せない者、生まれてから一度も口を利いたことがないと噂されている者、しじゅうペンチややつとこの先をなめてしまう者や常に薄ら笑いを浮かべている者などがおり、一度この部隊に入った者は、たいてい退役まで他の部隊へ移動することがなかったため、その存在はなにやら神秘のヴェールにつつまれてさえいたが、ある将校は、連中が昇進や昇給といったものに皆目興味を示さないのはせめてもの救いだと述べた。

セフィロス氏の愛すべきクラウド・ストライフはしかし、この第二八部隊において日々ほがらかに労働に励むことのできるタイプだった。彼はなんの因果か無愛想で癩癩持ちで、人と仕事を共有することが大嫌いという、指導者などという立場にはおよそ向かないおやじを上官にあてがわれ、日々備品や在庫の管理をしつつ、武器や乗り物といった穏当なものだけでなく、切れたベルトやひしゃげた飯盒やすり切れた編みあげ靴にいたるまで、持ちこまれたものはない。なんでも直さねばならない羽目に陥っていた。そしてクラウドはそういう仕事をこなしてなお、兵士としての訓練や演習やさまざまな業務をこなさねばならなかった。自分は人の倍働いており、どう考えても神羅カンパニー一の高給取りになるべきだと考えているのだった。

セフィロスがよりによって敷地の一番はずれにある第二八部隊の作業場にたどりつき、あた

りを見回しても見慣れた金髪が目に入らないので、仕方なく近くにいた見るからに陰気な男に声をかけたところ、男はセフィロスを見もせず顔もあげず、数秒無言で時を過ぎたのち、かすかに震える指で静かにある一点を指さした。セフィロス氏が震える指の先をたどっていったところ、一台のトラックが目にと留まったので、彼は礼を云ってそちらへ向かった。

かなり旧式で使い古されたおんぼろのトラックに近づくと、車体の下から二本の足が突き出しているのが見えてきた。不幸にも下敷きになって死んでしまったかのように見える。人の足というのはそれだけ見ればずいぶん妙なしろものであり、セフィロス氏はあやうく深い哲学的思索に誘われかけたが、首をふって追い払った。

「こいつおれの云うこときけないっていうんだ」

そう云いながらトラックの下から這いだしてきたクラウドの両手は、黒っぽい液体にまみれてぞつとするほど汚れており、あたりにはエンジンオイルの臭いが充満していた。

「なるほど、それはいけない子だ」

ここではセフィロスは誰からも注目されなかった。なぜセフィロスがここに来てクラウドと会話をしているのかなど、第二八部隊の連中にとつてはどうでもいいことだった。ひよつとするとセフィロスが誰なのか知らない人間がいる可能性さえあった。それでセフィロスは実に気楽な気持ちで、いつでも慰めを求めてクラウドに会いに来ることができた。彼が一時間もクラウドのまわりでぶらぶらしていても、誰もなにも云わなかった。セフィロスがあんまり油を売

りすぎているとザックスが迎えに来たが、ここではさしものフェア氏の陽気さも、周囲を和ませ打ち解けた気分^にさせることはできず、彼は自分の武器が封じられたように感じて、いつも早く帰^りたような態度をみせるのだ^った。

「で？ あんた休みもらったの？」

クラウドが腹立ちまぎれにトラックの横をひと蹴^りすると、エンジンが実にうらみがましい音を立ててか^っつた。セフィロスはうなずいた。

「作戦成功した？」

セフィロスはにんまりした。クラウドは黒い油まみれの両手を、ほとんど同じくらい油まみれに見える布でふきにか^っつた。

「で、おれは？」

「この同僚上官その他はおまえに休みの許可をくれるだろうか」

「くれるだろ。だいたい、おれがいてもいなくても誰も気づかないと思うし」

クラウドは油まみれの布を丸めて足もとの空バケツにつ^っこんだ。

「おまえは実にすばらしい職場にいるな」

「あなたのおかげかザックスのおかげでね、はいはい」

クラウドはバケツを持ち上げ、唯一の同僚ともい^うべき、彼の近くでうめきながらなにやら点検している男のところへ事情を説明しに向^かつた。

「ううううう」

とおやじは答え、いらだたしげに手を振った。それから痲癩を起こして、手にしていたスパンを放り投げたが、それはクラウドの話のためではなくて、明らかに目の前の仕事において、なにかがうまくいかないせいだった。

2 天国に一番近い島

七月二十三日 月曜日

プレジデント神羅がなぜ自分の息子上にセフィロスを愛しているように見えるのかということは、結局誰にもわからない謎だった。ザックスは「寂しいんじゃない？」と述べており、クラウドは「惚れるってそういうことだろ」と云い、セフィロス本人としては、プレジデントとその息子のあまり幸福ではなさそうな関係を考えずにいられなかった。プレジデントの正妻は、美人だがおそろしく気が強く、わがままで、およそ男と愛しあえるようなタイプの女ではなかった。息子のルーファウスは、プレジデントとこのおそろるべき妻とのあいだに出来ただけひとりの嫡男であって、正式な息子ではあったが、父親があちこちに愛妾を持ち、そこらじゅうに種をばらまいているという噂が絶えなかったため、目に見えぬライバルが多数おり、それ

らのうちの誰かが父の寵愛を得ようものなら自分の地位はたちまち危うくなると考えていた。彼は常々、自分が会社を継いだら真つ先にすることは、おやじの子どもたちを全員探しだして皆殺しにすることだと云ってはばからなかった。父親はこの息子のなかに非凡な能力と器とを見てとっていたが、まるで嫌っているかのようにできるだけ自分から遠ざけていた……彼らはある面で似すぎていたのだ。

おそらくは、ルーファウス神羅が考えるほどにプレジデントは放縦な性生活を持つているわけではないし、そんなことをしていたら養育費用だけで大変なものになるだろう。結局、プレジデントが欲しかったのは、同じ非凡な息子でも自分とは性質の違う息子だったのだということになる。それで、プレジデントはセフィロスをそのような息子としてとり扱うくせがあるというわけだ。プレジデントのセフィロスへの気遣いは、たしかに大したものだった。出社拒否ぐせを矯正しようともせず、かえって休みを与えたり、気分転換に出かけさせたり、コンサートやオペラのチケット、稀覯本などのものを贈ってよこしさえした。妙なことだが、ふたりの趣味はなぜか似通っていて、互いに物品の融通がきくのである。それがまた一部の人間の不興を買うことになるわけだが、プレジデントはそんなことを少しも気にしなかったし、セフィロスも気にしなかった。

「まあひと月ものんびりしてくれば、きみの気も晴れるだろう……」

プレジデントはパイプに煙草をつめながら云った。彼がパイプを吸うのは機嫌のいいときで

あるのをセフィロスは知っていた。セフィロスはソファにゆったりと座り、たいへん品よく、しかし挑むように微笑んでいた……機嫌が悪かったのである。プレジデントはパイプをくわえ、セフィロスをちらりと見て、苦笑を浮かべた。

「わしにねぎらいの言葉を期待しているんじゃないだろうな……もちろん違うだろう……きみはわしに恩を売りに来たのだ。わかっている、わかっている！ きみは尊い犠牲を払ってきみ自身を押し殺し、わしのために働いた。ほとんどひとりで……きみ以外の誰にこんなことができるだろう、わかっている、わかっているとも！」

プレジデントはわざと顔をしかめ、パイプを振っていらだたしげに云った。そしてセフィロスが微笑んだのを見えますます顔をしかめ、パイプを口にくわえた。

「ひと月だぞ……それ以上はいかん……それ以上わしひとりにあのハイデッカーの相手をさせるつもりかね……」

プレジデントはセフィロスをどこからかうようにちらりと見やった。プレジデントがこんなことを云いながら、こんな目つきで人を見ることはめつたにないに違いない。彼はくつろいでさえた。椅子にどっしりと腰を下ろしてもたれかかり、パイプをゆったりとふかしながら、目を細めてセフィロスを見た。

「いい場所がある……エフロギア島といって、南国における魔晄エネルギー政策のひとつの成功事例のだが、楽園のような島だよ、まったく……天国に一番近い島……旅行パンフレット

などにはそう書いてあるらしいな。実際、いい島だ。わしもあの島にはいくつか思い出がある……」

プレジデントはほとんど眠ってしまったかのような目をして、心のうちにある過去の記憶を探っているようだった。しばらくのあいだ、彼の目は過去をさまよった。それから戻ってきて、現実的な実業家の顔になった。

「八月に、その島で古典悲劇の復刻上演があるそうだな……わしのところに案内とチケットが来たよ。あの島の学者たちに研究費用を出しているのは神羅だからな、当然といえば当然だが、あいにく八月は少々予定が重なっているからね、チケットはきみにあげよう。劇の関係者のなかに、ルシル・ハーメイン教授の名前があったが、きみは彼女のファンじゃなかったかね？ 彼女もあの島にいるのだったな……研究島のように……会えるように手配しておこう。話を聞くなり、珍しい本を見せてもらおうなりするといい」

プレジデントは机の引き出しから、白い上質な封筒を一通とり出し、セフィロスに差し出した。「古典悲劇ティムゲーネ三部作復刻上演第一回『ティムゲーネ』 エフロギア島古代種の劇場にて 八月十二日夜七時より」というようなことが書かれたパンフレットと、チケットが二枚入っていた。

「きみはその劇が好きだろう、ええ？ きみの好みはわかっとなるんだ……島に昔わしが別荘として使っていた建物がある。もともと島の貴族の持ち物だね……いまはもうほとんど行くこ

ともないが。都市開発機構のエフロギア島支部長がわしの別荘の管理もしてくれている。あの島にこだわらなければもつと出世できたろうに、バカな男だね。彼に連絡しておこう。移動の手配はその男がしてくれるだろう。誰か一緒に連れて行く人間はいるかね……」

この手の質問に、肩をすくめる以外にどうしろというのだろうか？ 最近セフィロスに小さな連れあいができることを、プレジデントは知っていた。いまのところふたりはこの問題について話しあつたことはない。たぶん今後もないだろう。

「ふたりだな……そうに決まつている……どこへ行くにもひとりというのは具合が悪いものだ。明日じゅうに詳細を連絡しよう。そのあいだに南の島に必要なものを用意するんだね。浮き輪だの麦わら帽子だのといったやつを……」

セフィロスの小さな連れあいは、麦わら帽子はあつてもいいが、浮き輪のほうはいらないと云いはつた。連れはいまや船酔いのためにひどいことになっており、セフィロスの横でぐつたりと丸くなつて、海などくたばりやがるがよいとぶつぶつ云っていた。彼の頭には、水色のリボンが巻かれた麦わら帽子が乗つていて、左の足首には、青いミサンガのようなものが巻きつけられていた。

クラウドの母さんは、息子が南の島に行くことを聞きつけて、さつそく海辺に必要なものをあれこれ見つくろつて送つてよこしたが、水色リボンの麦わら帽子は、クラウドが十二歳かそこらになるまで夏にかぶつていた帽子であり、母さんが自分の手で編んだのだつた。母さんは

大きくなった息子のためにそれをほぐして編みなおし、万が一大きかった場合を考えて、青色のゴム紐をくつつけてくれた。

青いミサンガのほうは、息子が水の事故に遭わないようにと母さんが編んで送ってくれたのだ。そのお守りには、水辺の悪い精を寄せつけないための、ニブル地方独特の複雑な竜の文様が白い糸で編みこまれている。もしもお守りが切れたら、それはこの文様がその力を発揮して、身代わりになって悪い精から守ってくれたことを意味するのだ。だが、さすがにこの母さんの愛のこもったお守りも、クラウドを乗りもの酔いからは守ってくれないようだった。

彼らの目指すエフロギア島は、温泉で有名なミデイル周辺に広がる諸島のうちのひとつである。そのあたりには、大小二千近い島々が宝石のような海の上に散りばめられているが、多くは岩や石ころだらけの小さな無人島で、人が居住している島はそれほど多くない。エフロギア島はそうした島々のなかでは面積も大きく、人口も多く、人が居住している島としては世界の最南端にある。ミッドガル空港から飛行機で十二時間あまり、ミデイル空港に降り立つてから、さらに定期船に乗って一時間ばかり海上を南東へ進むと、目のさめるような青い海水をたたえた、絵のように美しい港が観光客を出迎える。島は三日月型をした本島と、その横にくつつくようにして浮いている丸っこい離島とからなる。本島と離島とは橋で結ばれており、本島は押しも押されぬ高級リゾート地として名高いが、離島のほうは神羅によって「エフロギア島神羅古代種研究所」なる研究施設と大学が建てられ、神羅カンパニーによって管理されて

いる。そのためこの離島はいつのころからか研究島と呼ばれるようになり、いまではその呼び名がすっかり定着してしまつた。

とはいへ、この楽園のような美しい島が歴史の表舞台に登場し、リゾート地としてこれほどの人気を博すようになったのは、ここ三十年ほどのことである。云うまでもなく、そこにはやはり神羅カンパニーと魔眺との影響があつた。「μ」―ε―γλ一九五九年、魔眺エネルギーを発見した神羅カンパニーは、それから十年近くかけて魔眺の採掘と実用化に成功し、世界各地に魔眺炉を建設してその支配的地位を確固たるものにしたわけだが、この南国エフロギア島は、神羅にとつて初期の魔眺炉建設予定地のひとつだつた。海底に魔眺エネルギーが豊富にあつたことや、世界のほとんど最果ての島に魔眺炉を建設することによって、神羅カンパニーの威信のほどを示すことができるなどの政治的理由もあり、ニブルヘイム魔眺炉が完成した翌年には、もう島に神羅カンパニーの出張所ができ、魔眺炉の建設が進められることになつた。

エフロギア島魔眺炉は一九七三年に稼働にこぎつけたが、翌七四年、なぜかプレジデントは突如エフロギア島魔眺炉の廃炉を決定、魔眺炉を無人島へ移設し、エネルギー輸送のための海底ケーブルの開発に尽力すると発表する。神羅カンパニー広報いわく、「地形の関係で採掘に致命的な問題が生じたため」ということだが、ともかくもこのおかげで、島の美しい自然は破壊を免れ、神羅は魔眺炉がためなら観光だとはかりに、島を開発し観光地化することに力を注

ぐようになる。道路が整備され、高級ホテルや娯楽施設が作られ、エフロギア島は世界有数の高級リゾート地となった。夏ともなれば、毎年世界中からこの島めがけて観光客がどっと押し寄せる。漁業とわずかばかりの農業や牧畜で暮らしを立てていた人々は、いまや多くホテルの従業員や、ショッピングモールや飲食店の店員として働いている。

ほどなく船はエフロギア島本島の港へ、二十人ほどの人々を吐きだした。七月に入り、島は観光シーズンを迎えようとしていた。港には貨物船や漁船、個人所有のクルーザーなどが並び、いかにも活気づいていた。しきりに船を指さしてなにやら商談中の男たちの一群があり、雇われて荷物の積み下ろしに励む地元の子どもたちがおり、猫があたりをうろろろしていた。古い帽子を阿弥陀にかぶった、腰の曲がったじいさんがひとり、港の隅で携帯用の椅子に座って煙草をふかしながら、もう長いこと身動きひとつせず、じつと海を見つめていた。ホテルの送迎バスがあり、タクシーがあり、そして真っ黒な高級車があった。車の前に、口ひげを生やした五十がらみの男が立っていた。彼は周囲に興味のなさそうな顔でつつ立っていたが、船から下りてきたセフィロスの姿を見つけて近づいてきた。

「お待ちしておりました……プレジデントからお話を承っております……ノリスと申します……都市開発機構の責任者をやっております……プレジデントの別荘の管理も業務の一環です……」

差し込まれた名刺には、「神羅都市開発機構エフロギア島支部部長 エルドウィン・ノリス」

と書いてあった。神羅都市開発機構は、神羅カンパニーの都市開発部門から独立してつくられた会社だが、各地の魔晄炉建設にともない、その地方の開発と発展の面倒をみるのである。インフラを整備し、居住地や商業地を広げ、地域が経済発展の恩恵にあずかれるようにする。社員たちはミッドガルから派遣されてその地方に住みつくが、彼らの住宅は一種のモデルハウスの役目をしており、魔晄エネルギーを活用した贅沢で快適な生活というのがどういふものかを、住民たちに誇らしげに示すのだ。ゆえに地方に派遣されるのは花形のエリート社員ということになり、都市開発機構の地方支部勤務というのは、本社の連中のあいだでも一種のステータスとして認識されていた。支部部長ともなれば、もうエリート中のエリートのはずだが、そういう人物につきものの押し強さや押し出しのよさといったものは、なぜかこのノリス氏からはあまり感じられなかった。

しかしノリス氏はやはりたいそう高そうなスーツを着ていた。上着は脱いで、ベスト姿だったが、その生地や仕立てのよさ、履いている靴の高級感は疑いようもなかった。細身で、どこか高貴な印象を与えるすつと筋の通った高い鼻が顔の中央にそびえていたが、沈んだ灰色の目は人を信用していないことを告げており、口まわりを丸く囲んでいる口ひげの下に隠れた薄い口もととあいまって、どこか冷たい印象を与えた。全体的に、暗い感じのする男だった。

彼は愛想笑いのひとつもしないで、荷物をトランクへ、人間を後部座席へ押しこむと、車を転がしはじめた。クラウドがセフィロスを肘でつついてきた。車内は非常に気づまりだった。

港を抜けて海岸線沿いの道に出ると、ノリスは口を開いたが、まったく事務的な口調だった。「島へははじめてでいらしゃいますか？ プレジデントの別荘へは二十分ほどで着きます……観光地からは離れた私有地にありますからプライベートは十分に保たれるかと思えます……打ち明けて申せばその別荘は立地が最高で、プライベートビーチもついているのですから、貸し出したら大変よいと思うのですが、プレジデント個人の持ち物ですから、なにも云うことはありません……もとはこの島の貴族が所有していましたが、一族の末裔が三十年ほど前に未婚で子どももいないまま亡くなり、ちょうどそのころ神羅カンパニーがこのあたりの開発をはじめましたので、プレジデントが個人的に買いつたわけです……わたしはそのころこの島へ赴任してきました……当時はほんとうになにもない島でしたが、いまではこのように世界中の間がぜひこの島でバカンスをと思ふような場所になりました……」

クラウドはもう寝かけていた。ノリスはあまり抑揚のない調子で話す男だった。セフィロスは窓の外を見ていた。車は少し海岸線沿いを走り、島を縦断するために左へ折れた。港から少し離れると、急に風景が変わって、低木や短い草に覆われた、荒々しい自然がむき出しになる。大地はうねうねとうねって、島の中央に向かって勾配を上げてゆく。ところどころにオリーブやぶどうの木が並ぶ果樹園があり、民家がかたまっている箇所がある。遠くで山羊がひまそうに草をはんでいるのも見えた。

ふと車のスピードが緩み、進行方向へ目を向けると、あたりいっばいの山羊で道路が塞がれ

ていた。山羊どもは車に向かつてメーメー鳴いたり、とことことドアのところまでやってきて中をのぞきこんだりしている。セフィロスはクラウドをつついて起こした。クラウドが窓を開けると、一頭のおそれ知らずの山羊が、好奇心たっぷりの顔を車内につっこんできて「メエエ」とやった。山羊というものは、クラウド・ストライフの中ではどちらかというと食料に分類されているのだが、愛玩動物としても悪くはない。かわいげという意味では牛より少し劣るうえに少々匂うが、暇つぶしの相手としては十分だった。

「申し訳ありません……いまだかせますので……」

ノリスはいらいらと云い、丘の上からのんびりと下ってきた男に向かつて怒鳴った。

「早くこいつをどかしなさい、まったく……ここは公共の道路ですよ……」

やってきた男は六十を過ぎたひよろしたじいさんだった。日に焼けた人懐っこそうな顔をくしやりとさせて笑い、かぶっていた灰色の帽子をとり上げて詫びの代わりに振ってみせた。それからわざとかと思われるほどのろのろと仕事にかかり、ほれほれと気のない調子で山羊を斜面へと追い立てた。ノリス氏はすっかりいらいらして、ハンドルをこつこつ指で叩いた。この間、後部座席では山羊対クラウド・ストライフの丁々発止の死闘がくり広げられていた。クラウド・ストライフは山羊に向かつて「べええ」と舌を出し、挑発に激昂した山羊は「メエエエエ」と激しく応じ、あわや大戦が勃発して世界の終末が訪れるかに思われたが、そのとき車はにわかに前進を開始し、山羊はあわてて窓から首を引き抜いた。

「メエエエエエエエ！」

山羊は恨めしげに怒鳴り、クラウド・ストライフは窓から顔を出して、山羊に向かつてあつかんべをしてみせた。ひよろひよろした山羊飼いの親父が、こちらを見てにやにや笑っていた。「申し訳ありませんでした……ときどきこのようなことがあるのです……島の住民はどうも文明度が低いところがありまして……」

ノリスは迷惑そうに云った。

「観光に開かれてはいますが、それはごく一部の地域の話であって、基本的にはまだまだ発展途上の島なのです……三十年程度では、人間を変えることは不可能なのでしょう……この島はそうした意味ではあまり進歩していません。当然のことかもしれませんが……」

どうもノリス氏は、この離れ小島にいろいろと不満があるらしかった。生粋の都会人なのかもしれない。開明的で先進的な教育を受けてきた男が、田舎へやってきて、田舎者の啞然とするほどの旧態依然とした頑迷さとめぐりあう。よくあることだ。彼らは変化を頑なに拒否する。魔晄エネルギーを受け入れ、その便利さを受け入れはしても、それにともなうて変えなければならぬ思考様式のほうは、決して受け入れようとしなないのだ。

やがて車は幹線道路を抜け、脇道へ入っていった。しばらく行くと、海岸沿いの細い道に出た。島の外を回りこむように少し走ると、右手に小さな砂浜と別荘とが見えてきた。

クラウドの予想では、その別荘なるものはきつと、金持ち臭ただようガラス張りの現代的

ヴィラというようなけつたいなものに違いないということだったが、そんなことは少しもなかった。ガラスどころか島の民家と同じように漆喰の白壁をさらした、いささか年代がかった建物で、横に広い庭のある、素朴な感じのする家である。道は少し下りながら庭の脇のあたりで砂浜となつて途切れ、ノリス氏はそこで車を停め、ふたりに降りるよう促した。

「食事の用意と清掃に、毎日家政婦が来ます……この専属の使用者でして、もともとは先にお話しした貴族に仕えていた使用人なのです。その夫は庭師で、これもこの専属の使用人です。プレジデントが使用人ごとその貴族から買ひとつたのです……」

ノリス氏は話しながらトランクを開け、荷物をとり出して両手に抱え、庭を回りこむように歩き出した。ポプラやオリーブ、アカンサスの茂る広い庭を回りこむと、海に面して建てられた白い別荘が見えてくる。玄関前に広いテラスがあり、四本の白い円柱が張り出した屋根を支えている。屋根はそのまま二階のバルコニーになつていて、テーブルセットやプランターが置かれてるのが見える。テラスにも家の周りのあちこちにも、赤土色をした素朴な素焼きの壺がプランター代わりに使われていて、スマレやナデシコ、アネモネなどが揺れている。窓辺には鮮やかな赤いブーゲンビリア、家の脇に一本のレモンの木が黄色い実をつけていて、その脇に小さな木のベンチが置かれていた。

家の前に、噂の家政婦と庭師らしい年とつた夫婦が立つて、客の到着を待つていた。ノリス氏がうなずくと、夫婦はおっかなびっくりやつてきた。

「庭師のミロス氏と家政婦のミロス夫人です。彼らには明確な就業規定というものがありません……ご面倒でも話しあつて決めていただけますか……これが鍵です……お渡ししておきます……原本なのでなくさないでいただけると助かります……なにかありましたら事務所かわたしの個人番号にお電話を……プレジデントがくれぐれもよろしくとのことですよ……」

「なにやら不思議な男だ」

セフィロスはノリスの車が去つてゆくのを見送りながらそう云つた。

「そう思わないか？ 都市開発機構の部長みずからが公用車を運転し、こんな客案内の仕事をするとするのはどうということなのだろう。もしわれわれがプレジデントの客であるからして上客なのだとすることであれば、もう少し違った態度をとりそうなものだし……」

「ああいう性格なんです。口下手つていつたらしいのか、なに考えてんだかわかんないよな人でねえ」

ミロス夫人がうなずきながら云つた。夫人はころころと太つて、丸っこいひょうきんそうな茶色の目をしており、頭には花柄のスカーフをかぶつていた。夫のミロス氏は赤銅色に日焼けして、麦わら帽子をかぶり、半ズボンからひよろ長い脚を丸出しにしていた。線は細いが頑強そうで、庭師か農夫にふさわしい体だった。ふたりとも六十を過ぎていようだったが、どちらも見るからに健康そうだ。

夫婦はまずはセフィロスに握手を求め、自分たちはこの屋敷に雇われてここの維持管理をし

ている、ついにはお客様がたの滞在中のお世話をもいたしたく、どうかよろしくお願い申し上げたいと云った。セフィロスと握手をするとき、ミロス夫人は顔を赤らめた。たぶん、若い男に優しく手を握られ、夫人などと云われたのははじめてだったのだろう。ミロス氏のほうは、握手が終わったあとも、なにかほればれとした顔つきでセフィロスをしばらくのあいだ見上げていた。ミロス氏は我知らず背筋を伸ばし、命令を待ち受ける歩兵のような立ち方になった。それでセフィロスはぴんときた。

「番号！」

セフィロスが号令をかけるように云うと、ミロス氏は鉛筆のようにぴんとなり、「はっ、三八二九九七〇六、イオルゴス・ミロス二等兵であります！」

セフィロスは笑いだし、クラウドはあんぐり口を開けた。ミロス夫人は、「あんれ、まあ、イオルゴス、あんたまだそんな昔のこと覚えてたの！」

「ということは、ミロス二等兵は志願兵だ」

セフィロスは笑いを引っこめてクラウドに云った。

「番号でわかる。当時はどこの国でもそういう仕組みだった」

「わしや若くて、無鉄砲だったであります。お恥ずかしい」

ミロス氏はまだミロス二等兵の気分を引きずりながら云った。

「当時は、世界じゅうで戦争に熱を上げとったですからなあ。いつでもどっかの国がどっかの

国に戦争をしかけとつた。お隣へ侵略するやら同盟組んで大陸の反対側へ乗り出すやら……魔
眼が見つからなんだら、どうなつとつたことか。世界が急に狭くなつた時代でしたな、バカで
かい戦車やら、鉄道やらができて」

「神羅カンパニーが魔眼エネルギーを発見して覇権を握るまでの、長い争いの時代」

セフィロスは目を細めて云つた。

「あのころの軍隊は、いまとはなにもかもが違つた……」

「魔眼なんてもんはなかつたし、でっかい武器もなかつた。ソルジャーもおらなんだし、いま
考えりやまだまだ原始的でしたな。そのころだつて神羅は武器を作つとつたですよ、銃だとか、
大砲だとか。当時の神羅製作所は、頼まれりやどこにでも武器を売つてくれるちゅうんで重宝
されとつたですが、それがよくなかつたんですかなあ。いつの間にかあんな会社になつちま
つた。ややつ、こいつはいけねえこと口走つちまつたな。お客さんがたの会社でしょうにな。そ
れにいまじゃあわしらの雇い主でもあるで」

セフィロスはミロス氏の話に興味を惹かれた。そこでお茶に誘つてみた。ミロス氏はめつそ
うもないと首を振り、ミロス夫人は夕食を作るのが遅れると云つて、顔を赤らめて手を振つた
が、セフィロスがちよつと微笑むとたちまち陥落して、お茶はあたしがと家の中へ駆けこんで
いった。ミロス氏が、ふたりの荷物を持つてあとに続いた。

テーブルやプランター代わりの壺の置かれたテラスを過ぎ、玄関をくぐると、外より少し冷

たい空気が客を出迎えた。玄関を開けた先はすぐリビングになっていて、天井まで真っ白な漆喰の部屋が、窓から射しこむ午後の日差しを受けて、眠るような、夢見るような表情で彼らを出迎えた。右手の壁に暖炉と外へ出られるドア、暖炉の前にソファとテーブルが並び、壁際に沿って本棚がある。正面の壁にドアがひとつ、左の壁にはオリブ色に塗られた古いピアノ、ドアがひとつ、電話の置かれた小さな棚がひとつ。床はオーク材のタイルが敷き詰められていて、斜めの線や三角からなる、いかにも無邪気な模様を床いっぱいにくり広げている。

「左のドアは食堂に通じとるです。奥のドアを開けると廊下に出るですが、そのすぐ向かいの部屋は、昔は使用人の寝泊まりする部屋だったです。右奥に階段、左に浴室があるです。女房がいまお茶を淹れとりますで、先に二階の寝室へご案内するですかな」

ミロス氏はリビングを出て廊下を右へ進み、突き当たりにある階段をのぼっていった。二階の廊下に出る。左右にドアが二つずつ。

「間取りは上も下もほとんど同じになつとるです……左の手前が寝室で、奥は書齋とアトリエになつとるです。右の手前は客室として作られたで、これも寝室として使ってもらえるです。その奥が浴室になつとるです」

ミロス氏は左手前のドアを開け、広い寝室へふたりを通した。正面の窓は海に面しており、バルコニーに出られるドアがある。大きなベッドがふたつ並び、ソファとテーブル、クローゼット、化粧台などが置かれている。クラウドは寝室についているエアコンに興味を持ち、バルコ

ニーへ出て室外機をとつおいつ眺めていたが、しまいになにを思ったかポケットからナイフをとり出してネジを回し、外ぶたを外しはじめた。セフィロスもバルコニーへ出てみたが、美しいテーブルと二脚の椅子、相変わらずあちこちに置かれたプランターや、バルコニーの手すりを彩るブルーゲンビリア、そしてなにより目の前に広がる青い空と海とに、なにか目の中が青くなつたような気さえた。

「ややつ、坊主はなにやつとるだ？」

ミロス氏が出てきて、クラウドを見て首をかしげた。セフィロスはかまうことはないから書斎とやらに案内してくれぬかとミロス氏に云い、うれしそうに手をこすり合わせた。

氏が案内してくれた隣の書斎には、背の高い書棚、書き物机、緑色のソファとテーブルがあつた。セフィロスは読書人の習性としてすぐさま書棚に飛びつき、背表紙をざつと確かめていった。文学の好きな人であつたらしい。古今東西の小説と詩集が蔵書の大部分を占め、ほかに音楽理論書、美術全集、音楽家や画家の伝記、島に伝わる伝説を集めた本が数冊、植物と鳥類の美しい挿絵つき図鑑、辞書が数冊、文芸誌がひとそろい。セフィロス氏はまたもうれしそうに手をこすり合わせ、それから書棚の向かいにあるガラス戸のついた棚に目をやった。油彩絵の具、水彩絵の具、パステル、使いかけの膠や金箔、鉛筆に色鉛筆、たくさんの筆や刷毛が持ち主亡きままそのまま置かれ、おそらくデッサンの練習用に果物や花を盛られて用いられたに違いない花瓶や皿があちこちに置かれている。この家の主は自らも筆をとる、芸術家肌の人

だつたらしい。

「アナスタシア様ちゆうたです……」

ミロス氏は柵にしまわれた道具になつかしげな目を注ぎながら云つた。

「ここにお住まいだつたご婦人です。アナスタシア・ゼノス様ちゆうて、わしと女房がお仕えたダリウス・ゼノス様の伯母上に当たるです。生まれつきお体が弱かつたもんで、アナスタシア様の健康のためには、静かな海辺で、氣心知れた使用人とのんびり暮らしたほうがいい、ちゆうて、アナスタシア様のお父上がこの家を建てたです。五十年以上もここで暮らしなかつたですよ、使用人夫婦と一緒に。わしがゼノス家の本宅にお仕えするようになったときにや、親族一同みなお亡くなりになつとつて、アナスタシア様だけがまだ生きてこの家に住んどつたです。使用人は代替わりして、もとの使用人の娘夫婦になつとつたですが。アナスタシア様はしゃんとした、もののわかつた方で、ダリウス様はよく伯母上を訪ねて、あれこれ相談しとつたです……アナスタシア様も甥っ子のことが好きだつたですよ……」

ミロス氏はなにかの場面を思い出しでもしたのか、そつと微笑んだ。

「結局、九十近くまで生きてですよ、アナスタシア様は。しまいのほうじゃ、甥っ子に先立たれるのを本気で心配しとつたです。晩年のダリウス様は病気で苦しまれましてな、六十にならんうちに亡くなつたです。アナスタシア様がお亡くなりになつたのは、ダリウス様がお亡くなりなるほんの二、三年前のことだつたです……代々の名士ゼノス家はその代で途絶えたです

よ。一時は島の領主を務めとつた時期もあつた、えらい一族だつたですが。正確には、ダリウス様の弟のシモン様がおるにはおるです。が、早いうちに島を出て、よそで所帯を持つてるもんで、島には帰らんちゅうお心だつたですよ。ちやうどそのころ、神羅がこの島に來たです……それで、ゼノス家の屋敷のほうは買いつつてホテルにして、この家もヴィラだかなんだかちゅう名前で観光客用に貸し出すはずだつたですが、不思議なもんでプレジデントがこの家へ氣に入つたです」

ミロス夫人が階下から、お茶の用意ができましたよと叫んだ。彼らは部屋を出て、階段を降りていった。

「ダリウス様がお亡くなりなつたとき、お屋敷に仕えとつたのはわしと女房だけだつたです。ほかに年とつた執事がずいぶんよぼよぼになるまで頑張つとつたですが、これもしばらく前に死んで、あとはわしと女房だけ。ダリウス様がお亡くなりなつたあと、弟のシモン様が來て、屋敷の処分のごとで神羅と話しあつたです……それで、全部神羅に売り渡すことに決めたです。島の旧貴族の屋敷は、神羅にとつちや観光客が食いつく目玉商品に見えたに違ひねえですよ。實際、この家だつて二束三文で買いたたかれそうになつとつたです。プレジデントが視察に來て、この家を氣に入つて、自分用の別荘にするちやうて直接シモン様から買い上げなんだら、わしらなんぞ仕事なくして、とつくにホテルの清掃係あたりになつとつたですよ、なあ、マリ
アよ」

マリア・ミロス夫人はふり返り、太った腕を振り回しながらうなずいた。

「そうですね。プレジデントってお人はね、まあ人によって評価はいろいろだろうけど、あたしたちにとっちゃ救いの神だわね。この家をシモン様の云い値で買いつけてくれて、あたしたちのことは、この家と庭を維持管理するのに必要だつて、これまでとおんなじ条件で雇つてくれたんですからね。でもだからつて、プレジデントはこの家にいつもいるわけじゃなし、いないことのほうがうんと多いんですよ。ここ十五年くらいは一度も来てないわね。なのに相変わらずあたしたちにお給料払いつづけてくれるんですよ。あたしたちのほうでも、毎日ここに来て窓開けて風通して掃除して、この人は庭の手入れして……あたしたちのお給料なんて別にたいした金額でもないからいいのかもしれないけど、端から見やドブに捨ててるようなものではないか？　なんていうか、風変わりな人ですよ、プレジデントつて。金持ちつてのはそういうものだらうなんて、この人は云いますけどね」

「プレジデントが使いきれないほど金を持っているというのはほんとうだが、そんな使い道があるとは知らなかった。ところで、わが金髪の君はどこへ行ったのだろう」

ほどなく、クラウドがなにやら汚れた手をして玄関から入ってきた。ミロス夫人はクラウドに手を洗うように云い、クラウドは夫人に云われるままに浴室へ手を洗いに行った。食堂は感じがよかった。現代的な広いシステムキッチンに大きな冷蔵庫、黒光りするオーク材のキッチンカウンター、そして白いクロスがかけられた、窓辺に置かれた大きなダイニングテーブル。

観音開きの窓は外に向かつて開け放たれ、海がすぐ目の前に見える。

ミロス夫人が大きなお尻を揺さぶって台所を行き来するのを、戻ってきたクラウドがキッチンカウンターに頬杖をついて眺めていた。カウンターの上にはブドウやイチジクやリンゴの盛られた果物かごがあり、クラウドの手はかごの上のブドウと自分の口とを盛んに行き来していた。

「いまサンドイッチを切つてるところですよ！」

夫人が背後に向かつて叫んだ。

「サンドイッチと、ナッツを入れたパイがあるわ……あんたがいつもお腹をすかせてるつてことは、云われなくなつてわかつてるんですからね、あたしは！　あたしにも息子がいるんだ……あんたよりたぶん二十以上も大きいけどね……」

ミロス夫人は大盆いっぱいサンドイッチや焼き菓子のをせて運んできた。皿をテーブルの上に並べ、お茶をめいめいのカップについて、夫人は慎ましく引き下がってテーブルのそばに控えた。夫もその脇にピンとなつて構え、手を前で組んで控えるような格好になった。

セフィロスはふたりに、どうか一緒に席について話を聞かせてくれと云つた。夫人はお客さんと同席なんて滅相もないと首を振り、ミロス氏もさかんに首を振って反対したが、セフィロスが夫人に微笑み、ミロス氏に懇願すると、ともにたちまち陥落して、遠慮がちにセフィロスの向かいに座つた。クラウドはセフィロスの横で、早くもサンドイッチをひと皿平らげようと

していた。

「わしやダリウス様のお屋敷に奉公に上がる前に、五年軍隊におりました」

ミロス氏はセフィロスにうながされて昔の話をはじめた。

「ミデール諸島連合軍に所属しとりました。諸島の独立を守るために戦ったです……あのころ志願していった連中はみんなそうだったです。わしのような若者だらけだったですよ、このあたりだけじゃなく、どこの国でもですな。わしやもともとこの島の出身じゃなく、別の小さい島の出ですが、当時、わしらの連合軍では、ダリウス様が指揮官を務めとったです。わしやなぜかこの方に気に入ってもらったですよ。それまで一面識もなかつたですが。向こうがしよつちゆうミロス！ ちゆうんで、わしや、はっ、なんでありますか！ ってな具合で。

戦争はむごいもんだつたです。ダリウス様はいい指揮官で、わしら奮闘したですが、仲間の部隊にはほとんど全滅するのもありや、半死半生の身で命からがらなんとか助かつたのもいるです。あのころ神羅の開発した地雷ときたらひどいもんでしてなあ、ひと思いに殺してくれりやいいに、あえてそこまでの殺傷能力を持たせんかつたです……頭のいいやり方ですよ。即死すりやそのぶん兵が減るだけだが、半死半生にすりや治療や看護の人員がとられちまう。結果みんな疲弊する、つてなもんで。片手もあげたり片足がぶつ飛んだりしたまま生き残つたのがずいぶんいるです。この島にも何人かおる。わしや幸いこのとおり五体満足で生き延びたですが、奇跡みてえなもんですよ。あのころのことは、いまだに夢に見るです……。

そんなこんなで戦争が終わったあと、みんなしてボロボロなって引き揚げてきたのですが、そんなときダリウス様が、ミロスよ、おまえこのあとどうする、ちゆうて声をかけてくれましたなあ、わしが四人兄弟の三番目で、故郷の島に帰ったところでどうにもならんちゆう話を覚えとつてくださったです。帰る場所もないならうちで働かないか、ちゆうてくださいましてな、わしやそんなときからダリウス様のお屋敷の使用人だです。そこでそのお屋敷に、この女がおつたですよ」

ミロス夫人は、あつという間に皿を空にしてゆくクラウドをあっけにとられて見ていたが、自分の話題が出たのを悟って一同を見まわした。

「あたしは十五の歳からお屋敷で働いてましたからねえ。その前に料理番をしてた人があたしの親戚でね、歳とつてきたからつてんで、あたしに仕事譲ってくれたんですよ。子どものときから料理だけは好きでやりましたからね」

気のいい夫人はここで頭を振り、お茶を入れ替え、クラウドが食べ尽くしたサンドイッチをもう一度作るために立ち上がった。

「ところでおまえはなにをしていたんだ」

猛烈にお茶をすすり、軽食をかきこむクラウドにセフィロスは訊ねた。

「ひへはへつびほひへはんはほ」

クラウドは口をいっぱいにしたまま答えた。セフィロスは彼との長年のつきあいで、はひふ

へ言葉に習熟していたため、云わんとするところを理解してなるほどと云った。

「家の設備を見ていたのか。それでなにがわかった」

クラウドは今度はちやんと食べ物飲みこみ、お茶をすすったのちに、

「ここんち、えらい金がかかってるんだ。エアコンも給水用のジェットポンプも三十年くらい前の最新のやつなんだ。おれ、ここんちにあるのと同じ給水ポンプ、実家につけようと思って調べたことある。でもあのタイプのやつ、おれの給料半年分くらいするんだ。要するにさ、金かけると、水の出方も違うんだよ。だからおれ金持ちって嫌いなんだ。母さんが毎日井戸から水汲んで、風呂に入るのにお湯沸かしてるときに、金持ちは給湯器とジェットポンプ設置して、それでこんな島でえらい水圧出してシャワー浴びたりできるんだ」

とこのようにまくしたてた。いささか腹が立っているらしい。ミロス氏は何度もうなずき、「ここんちの水道と来たらえれえもんですよ。そのへんはプレジデントが買い取ったときにみんな手を入れたです。いま新しく建てたつて、普通の人間にやこんな設備のいい家は建てられねえんでねえかな」

「家の設備のことは皆目わからないが、この家は少々変わっている気がする……というのも、どこにも時計がない」

「ああ、そりやプレジデントがみんな外しちまったですよ」

ミロス氏がうなずきながら愉快そうに云った。

「正確に云うとご婦人ですが。プレジデントがよくご一緒してたご婦人がおりましてな、ここにいとときくらい、時間を忘れてのんびりしなけりやだめだちゆうですよ。その方は、しょっちゆう時計を見るプレジデントを叱ったです。で、ある日腹を立てて家じゅうの時計をみんなとつばらちちまつたです……面白い方だったですよ。裸足で庭を走ったりなさって……わしやプレジデントに頼まれて庭の木に吊り椅子をつけてやっただです。それからあのレモンの木も植えてやっただです……」

するとこの美しい別荘とその庭には、美しいひとつのロマンスがあつたわけだ。セフィロスがくつろいで長い脚を組み、目を細めて満足げに話を聞いていたので、ミロス氏も人を喜ばせた満足を感じたらしかった。彼はどうも、セフィロスの前にいると自動的にかつての自分の上官兼主人との関係に戻ってしまうらしかった。

ミロス夫人がふたたび大盆にサンドイツチを乗せて運んできたとき、急に地面がぐらぐらと揺れ出した。

「なにごと?」

クラウドはテーブルにつかまって声を上げた。

「地震だ」

セフィロスは揺れの具合を見定めるかのようにじつと目をこらしていた。

「あれまあ、最近ちよっと多いんですよ……ふう、止んだみたいね……」

「この島は火山島ですからな……このあたりにや海底火山がわんさかあるですよ。大方そのせいです」

「この島じゃね、地震のこと、竜が暴れてるって云うんですよ」

「竜が暴れている？」

セフィロスが聞き返すと、ミロス夫人は微笑んで、ヨーグルトソースを塗って鶏肉をはさんだ薄焼きのパンをふるまいながら、

「古い云い伝えですよ。昔の人たちは、島には巨大な竜が巻きついていて、この島を守ってるって考えたのね。で、地震つてのはその竜が食あたりだか頭痛だかなんだか知らないけど、とにかく機嫌が悪くなつて暴れて、島を締め上げたり揺すったりするから起きるんですってさ。いまじゃもう、こういう云い方する人は少なくなつたけど、あたしの親くらいの人たちはみんなそう云つてたわね」

夫人のサンドイッチを、クラウドはまたも猛烈な勢いで食べ出した。夫人はクラウドに指をふつておどす真似をし、夕食前にそんなにががつ食べるもんじゃありませんよと云つたが、あまり本気ではなさそうだった。クラウドをほんとうに叱ることのできる女性がいるとしたら、たぶん母親だけだろう。クラウドもそれを知っていて、年上の女性のふところに、ときどきこんなふうな、ひとこともしやべらないうちからもぐりこんでしまふ。

ミロス夫人の話によると、夫人の仕事のスケジュールは、毎朝六時ないし七時にはミロス氏

とともにスクーターに乗って出勤してきて、朝食を用意し、午前中にこの家のありとあらゆる場所を掃除してまわる。しかるのち、昼食の用意にかかり、なにも用がなければ一端家に帰って休むが、夕方にはふたたびやってきて、食事の用意をする。前日までに云つてくたさりや、お客さんが来ようが食事抜きだろうが、たいいていのことは対応できますよあたしは、えええ。

やがてミロス氏は庭仕事に戻り、ミロス夫人は夕食の用意をはじめた。ふたりは別荘のまわりを散策するために、外に出ていった。外には大きな庭が広がっていた。周囲からの視線を遮るように、棕櫚の木を囲いがわりに植えてあり、ハイビスカスやスイカズラ、ジャスミンが花を咲かせていた。あたりはとろけるような夏の草花の香りに満ち、いちじくやマルメロや黒っぽいベリーなどが実りと成熟のときを迎えていた。

いちじくはおやつにぴったりだったため、クラウドは通りすがりにいちじくの木の股に器用によじのぼり、実をいくつかもぎとった。しばらく進むと、名前のわからない太くて背の低い木が植えてあり、その枝から卵型の吊り椅子がぶら下がっていた。クラウドはすかさず椅子に腰を下ろし、ブランコみたいに脚でこいで椅子を揺さぶった。クラウドの母さんが編んだ青いお守りも、一緒に揺れた。

その日の夜、ミロス夫妻が帰ったあと、クラウドは家を征服した記念に、冷蔵庫にミッドガルから持ってきた予定表を貼りつけた。裏面に磁石のついた小さなホワイトボードで、上部に

つり下げするための紐もついている。ボードの真ん中に青い線が引かれて左右に分かれており、それぞれがその日にやることを書きつけるようになっていいる。右がクラウドで左がセフィロスだが、ミッドガルにおいては、たとえばこんなふうには、お互いのその日の業務と帰宅時間を知らせる機能を持っていた。右欄「しごと きたく六じごろ」。左欄「ハイデッカーと面談あり。したくない。終わり次第鳥のように古巣を目指して帰巢する。十五時までに帰宅しているか世界が破滅しているかのどちらかだ」。クラウドはたいいていセフィロスの欄に出張してコメントを入れる。この日のホワイトボードに、彼はこのように書いた。「おれまだしにたくない」

このホワイトボードは小さくて軽いうえ、貼りつけられどこでも自宅気分を味わえることから、ふたりはたいいていどこへ行くにもこれを持って行って、冷蔵庫に磁石でぺたりとやることにしていた。休暇においては、このホワイトボードには朝食までにめいめいのやりたいことが書かれるようになり、食事の際、それを見ながらああでもないこうでもない議論することになる。クラウドはホワイトボードの真ん中に線を引きなおし、一歩下がって確かめた。そして満足げにひとつうなずくと、走ってきてリビングのソファに飛びこんだ。

「それで？ わが夜の君よ、休暇初日の感想はいかに」

クラウドは海を眺め、じっと考えこんだ。それから生意気にちよつと鼻の下をこすって、

「おれ山の生まれだから、海つてなじみがないんだ。山で遭難したとか、オオカミと遭遇したとかさ、そういうことならなんとかできそうな気がするけど、海で溺れたらどうしたらいいか

わかんないだろうな。おれ、破けた靴直すの結構得意なんだ。でも海じゃ靴が直せても役に立たないだろうし」

波の音が聞こえていた。セフィロスはしばしその言葉について考えをめぐらし、それから微笑んだ。

「山で死にかけたことなら何度もあるんだ」

クラウドはまだ話しつづけた。

「だからおれ、山で死ぬことについては想像できるんだ。でも海で死ぬってどんな感じだと思
う？　すごく苦しい気がする」

「おまえがなじみをもつかどうかは死にかけたかどうかで決まるのか？　興味深いな」

セフィロスは真剣な顔つきになった。

「だってさ、人の究極の体験って死ぬことだろ。ってことは、そこで死にかければ、そこで経
験できることはあらずし経験したことにならない？」

「……多少反論の余地がないでもないが、なりそうな気がする。考えたことがなかった」

「あんたでも考えたことないことなんてあんの？」

クラウドはびつくりした顔をした。

「考えるってことなら全部やったのかと思ってたよ」

「おれの考えたことのないことなど山ほどある。おまえといると、おれはなにも知らず、なに

も考えたことがないのだとよく思う」

クラウドはあくびをした。飛行機だの船だの車だの、今日はクラウド・ストライフのおそるべき乗りもの酔いには厄日のような一日だったに違いない。クラウドはソファに丸まって寝てしまった。彼はいつも小さな子どものように急に力尽きて、他愛なく眠ってしまう。それを見ると、セフィロスはなぜかとてもなつかしいような気持ちになる。彼にはそんなふう到他愛なく眠りこけるような子ども時代記憶がないが、あるいはこんなときには、その忘れ去られた記憶が無意識のうちから彼を呼んでいるのかもしれない。自分はここにいて、思い出せ、と。

セフィロス氏は絶え間ない波音と、クラウドの無邪気な寝顔とともに、あらゆるものが静かにその本来の姿をあらわす、あの内的な思索の世界へ誘われていった。

3 ルシル・ハーメイン教授

七月二十四日 火曜日 　　七月二十七日 金曜日

翌日、先に目を覚ましたのはクラウドのほうだった。どんなことだって、セフィロスより先になるというのはいいものだ。彼はわけもなく勝ちほこった気分になり、眠っているセフィロスを眺めてにやにやした。それからそつとベッドを抜け出し、下へ降りていった。

台所では、ミロス夫人がもう働いていた。大きなお尻を揺すりながらフライパンを揺すり、鍋の中身をかき回し、ときどき身がかがめて、冷蔵庫や棚の中から野菜や調味料といったものを取りだしていた。クラウドはキッチンカウンターに腕を乗せ、その上に頭を乗つけて、カウンターの上の果物かごからしきりとブドウを盗みながら、ミロス夫人の労働をしばしのあいだ眺めていた。

「あんたくらいの年齢の子には、休日の朝なんてものはないように思っていたけどね」

ミロス夫人は鍋の中にこししょうを振りかけながら、感心したように云った。

「あたしの息子はそうだったね。学校や仕事のある朝は、それでも無理やり起きてきたもんだけど、休日となりやもう、何度呼んだって起きるなんてことなかったよ。起きたと思うともう昼でさ。こつちにや手伝ってもらいたいことが山ほどあるつてのに、ぐうたらなやつだよなんて、あたしもぐちぐち云つたもんさ……でもいまはもう家にいないよ……仕事に出たきりでね……」

果物かごの横に、夫人がどこから買ってきたらしい牛乳の瓶と、人間の顔より大きな丸パンのかたまりがあった。クラウドは牛乳瓶をとって飲み、ついでパンをつかみとり、ちぎつてむしゃむしゃやりだした。

「朝食前にそのあたりを散歩でもしておいでよ。朝の海つてのは、そりやあきれいなもんだからね」

夫人は相変わらず鍋やフライパンから目を離さずに云った。そこでクラウド・ストライフは、パンを手を持ってむしゃむしゃやりながら出ていった。

玄関を出るとすぐに海というのは不思議な感覚だった。波の音がずっと絶え間なくしているのも不思議な感覚だった。クラウドは海にはあまりなじみがなかった。その途方もなさにおそれをなしたように、まずはしばらく距離をおいて玄関から海を眺めていた。やさしいバラ色と

薄黄色の空の下に、海は美しく澄んだ青さをさらして横たわっていた。パンを平らげて空腹のやつがおとなしくなり、目の前に広がる景色と潮風が体に馴染むのを感じると、彼は歩きだした。

最初に、浜辺をぶらぶら歩いてみた。数分歩くとせり出した崖に突き当たり、そこで行き止まりになってしまふのだが、誰もいない砂浜を独占していると思うと愉快だった。クラウドの数少ない海辺の経験というものによると、浜辺というものは常に混雑していて、人でごった返しており、みんな穏やかに休暇を楽しんでいるというより、暑さと人の多さにいらいらしている印象があった。だがここには静寂と潮騒と鳥の声とが満ち満ちている。クラウドはふいに途方もない自由を感じ、自分がおそろしく大きくなった気がした。海は際限なく開けていた。ビルも、山も、丘も、さえぎるものをなにも持たないで。クラウドは縮こまっていたものが開放されたのを感じて、大きく伸びをした。それから側転した。それから宙返りし、逆立ちで歩き、ザツクスからながあつても死守しろといわれている日課のスクワットをやりきつて、砂浜に転がった。大きな空が広がった。聞こえてくるのは波の音と甘ったるい鳥のさえぎりだけで、誰もおらず、なにもなかった。叫びだしたい気がした……こうでなけりやあいけないんだ、人間は。クラウドはそう思い、空腹を覚えた。

家の中に戻ると、ミロス夫人がかんかんに怒っていた。

「あんた、この牛乳みんな飲んじまったのかい？ それにここにあったパンも、こんなに食べ

ちまったのかい！　なんてこった、こんな大食らいの子は見たことがないよ！　それはあんなちふたりの今日一日分の牛乳と、朝と昼のパンなんだよ！　ええ、いまいまいつたら、うちの息子もひどかったけど、あんたはそれに輪をかけてひどいのね！　あたしをいじめようつてのね、そうに違いないよ！」

クラウドは努めて神妙な顔つきをしながら、果物かごのさくらんぼを食べ、種をみんな手のひらに吐き出した。ミロス夫人は地団駄を踏んで悔しがった。

連れを朝食に呼んでこいといわれて、クラウドが逃げるように寝室へ駆けこむと、セフィロスは起きていたが、まだベッドの中にいた。物憂げに肘をついて、なにかを考えこんでいるようにも見えたが、クラウドには彼がただぼうつとしていただけということがわかった。

「ミロス夫人のものらしき怒声が聞こえた気がしたが」

セフィロスはぼうつとした顔で云った。

「初日から、おまえはいつたいなにをやらかしたんだ」

クラウドが牛乳を飲みパンを食べた話をすると、セフィロスはうつそりと微笑んだ。

「かまうものか、あのご夫人に、おまえの底なしの食欲をうんと見せつけてやればいいさ。そしてせいぜいあの善良な夫人を料理漬けにして、きりきり舞いさせてやるといい」

「かもね。成長期となりや人がどれだけ食うかってこと、知らないやつが悪いんだ。あんた、まだ寝てたほうがいいよ。顔が眠そうだもん」

「そうだな、ミロス夫人の美味な朝食は、残念だがあきらめることにする。おれが泣くほど残念がつていたと伝えてくれ」

セフィロスは怠け者が怠惰の樂園へたどりついたときのような顔で、泥沼へでもぐつていくように布団の中へもぐりこんでいった。

ミロス夫人は相変わずかんかんになりながら、ふたり分の朝食を用意していた。クラウドは椅子に飛び乗って、自分の皿とセフィロスの皿からみんなとつて食べた。オリーブオイルと塩で仕上げたシンプルな野菜のスープ、チーズの乗ったサラダ、ヨーグルト、揚げた海老やタコや野菜の盛り合わせ、薄い生地が幾重にも重なった挽肉のパイ、など、夫人は朝から腕を振るって朝食をこしらえていたが、クラウド・ストライフは、夫人の早朝の長きにわたる労働の賜物であるそれらを瞬く間にみんな平らげてしまった。夫人はまたもかんかんになった。

「なんて子だろ、二人前みんな食べちゃった！ このやくざ者！」

クラウドは悠々とオレンジジュースを飲み干し、腹がくちくちくなった幸福に満たされて、盛大なげつぶをした。

セフィロス氏は昼近くになってようやく起き出してきた。夫人が負けてなるものかとはばかりにこしらえた大量の昼食を、クラウドはまたもみごとに平らげてしまい、夫人をふたたび激怒させた。夫人は今度こそ見ているがいいと云って、夕食の食材をありつたけ買いこむために出

かけていった。

「あの夫人はそのうち島中の食料をみんな買いこんで、食えるものなら食ってみろとかなんとか云いそうだな」

セフィロスは夫人の去った玄関を見つめて、ひとり愉快そうに微笑んだ。

「健康で大食らいの男児というのは、なぜか女性の心を非常にくすぐるらしい」

「おれの母さん、食事のたびに嘆いてたよ。男の子にこんなに食料が必要だなんて、ちっとも知らなかったつて。でもおれ、それでも我慢してたんだ。ほんとは食事のたびに、スープをもうひと鍋かパンをもう一斤食えたらいいのにつて思ってた。空腹つてさ、食後が一番ひどいんだ、おれの経験じゃ」

「わかる気がする。そしておれの勘では、ミロス夫人はどうもそういうことまで見抜いているような気がするな、すなわちおまえの育ちやなにかといったことを」

「なんでもいいけどさ」

クラウドはちよつと唇をとんがらかして云った。

「あの冷蔵庫のホワイトボード、どつか別のところにかけてない？ 毎日朝早くからあのばあさんが冷蔵庫のまわりうちよろしてるんじや、おちおち予定なんか書いてられないよ」

そこでふたりはホワイトボードを持って家中をうろつきまわり、ああでもないこうでもないと云つて、あちこちにかけて回つた。それは最終的に、玄関脇の壁にとりつけられることになつ

た。正確には、壁にとりつけられた帽子かけのひとつにかけられることになったのである。どうもものを書くにしては高さが少し高いようだったが、クラウドはそれに手が届かないほど小さくはないと云いはったし、セフィロスにとっては、冷蔵庫に貼りつけられたのでは高さが少々物足りないと思つていたところだったから、満足げにうなずき、ここにこのボードがあることはたいへんよいと云つた。ボードの隣には、クラウドの水色のリボンが巻かれた麦わら帽子がかけてあつた。

休暇はのんびり過ぎていった。セフィロス氏はせつせと朝寝坊に精を出し、決して六時だの七時だの、まして八時だのといった法外な時間に起き出すことをしなかつた。クラウドはその間ひとりであたりをぶらつき、山のような朝食をみんな平らげてミロス夫人を激怒させながら、庭を散策したり海で泳いだりした。

この日、朝クラウドが居間へ降りていくと、セフィロスが誰かと電話をしている最中だつた。セフィロスのものぐさはこの数日であらうとう極限にまで達して、朝の着替えというものを放棄するまでに至つていた。ウータイのかつてのミカドの一族からもらったといういわくつきの、孔雀の羽のような色合いをしたガウンをひっかけただけで、セフィロスはひどいときには昼まで過ごした。はじめは顔を赤らめていたミロス夫人も数日経つとなれてしまい、ガウン姿でソファに転がっているセフィロスを押しのけて掃除ができるようになり、いまでは「脚をしまつ

てくださいよ、閣下！」などと怒鳴っていた。

孔雀色に包まれて電話しているセフィロスを横目に、クラウドが夫人の戦場であるところの台所へ行って、夫人の目を盗んで冷蔵庫から炭酸水を取り出し居間へ戻ると、セフィロスは電話を終えて、ホワイトボードにこのように書きつけていた。

「午前十時、研究島のH教授と面会」

「H教授って誰」

クラウドは訊ねた。

「古代種言語研究の第一人者。研究島で古代種文字の解説に努めている、たいへん優秀な学者だ」

「あなた、その人と知り合いなの？」

「いや」

セフィロスは首を振った。

「面識はないのだが、プレジデントとはあるらしいな。おれに会ってやってくれるように特別に頼んでおいたとたぬきじじいが云っていたんだ。どうやら本当だったらしい。いま本人から、今日は暇かと電話が来た」

クラウドは顔じゆうを疑問符でいっぱいにしていた。セフィロスは笑って、クラウドをかつさらって外に出ていった。

「このうるわしい海辺で、わが君にひとつ質問したいことがある。ものぐさ、出不精、引きこもりの得意なおれが、なぜわざわざこんな南の島へ来たか」

「プレジデントのじじいに行きつて云われたから」

クラウドはにべもなく答えた。

「それもあるが、正確な答えではない。プレジデントのじじいは、自分が行けないからという理由で、おれにとある演劇のチケットをよこした」

「それで？」

「その劇というのは、二千年以上も前に古代種が書いたとされる戯曲がもとになっている。タイムゲーネ三部作といって、四十年前までは近代語で書かれた写本の断片だけが伝わっていた。第一部はなんとか完全な形で残っていたが、第二部と三部は散逸してしまい、その全貌は明らかでなかった。タイムゲーネという名の古代種の女性が、ある島で島民の迫害を受け、海に身を投げるのだが、身投げする直前に彼女は息子を産んでいて、この息子がのちのち真実を知って島の連中に復讐するという話なんだ。だがそもそも、その内容が古代のものにしてはあまりに先鋭的に過ぎたので、後世の偽作だという意見が大半だった。ところが四十年前、偶然にも二千年前のものと推定される写本が見つかったことで、それがほんとうに古代種の手になる作だったこと、それと舞台はこのエフロギア島だということがほぼ確定したんだ。歴史的な大事件だった」

クラウドは砂浜に穴を掘りはじめた。

「それで……ああ、興味ないという顔をしているな、当然だ、悪かった。とにかく、その三作の第一部を来月この島で復刻上演するんだ。この四十年で古代種劇の実態の解明は飛躍的に進んだが、その成果をついに目の当たりにできるんだぞ、考えただけで息が止まりそうだ。この島には古代種が作ったとされる劇場があっただな、それも当時この島の周辺に古代種文明が栄えた証拠なのだが……寝ないでくれ、お願いだ。ともかく、H教授……正確にはルシル・ハーメイン教授というのだが、彼女は古代種言語の第一人者で、発見された古代種写本の研究家で、今回の劇の原テキストの責任者なんだ。その人はすぐ隣の研究島にいる。神羅古代種研究所……あの島の研究施設はそう呼ばれている。プレジデント肝いりの研究施設だ。ハーメイン教授はその責任者でもある。おれにとつてこの人と話をすることはおまえにとつてセフィロスを見たの会ったのしゃべったのというくらいいたいへんな価値があるんだ」

「すごいね、それ」

クラウドは目をまんまるくした。

「あなた、その人のファンなの？」

「学者に対してファンという言葉がふさわしいかどうか知らないが、そうだな、ある意味そう云えるかもしれない」

「その人美人？」

「知らない。彼女について知っていることといえば、途方もなく膨大な知識をたくわえた語学の天才であることと、六十歳に近いか少々過ぎているかもしれないということくらいだ。大変な女性なんだぞ、古代種文字をほぼひとりりで、世界ではじめて解読した人なのだから」

「なんだ、そっちなか」

クラウドは残念そうに云った。

「その人すごい美人で、あんたが写真見るたびにどぎまぎするとかいうやつなのかと思つたよ」
「すごい美人の学者というのにもいるだろうが、学者に美貌は関係ないからな……少ないとも、本来の仕事からすれば。軍人に美貌が少しも必要ないのと同じように」

クラウドはその皮肉にちよつと笑つた。

「ま、しょうがないか、その人が怪獣みたいならばあさんで、すごいぎよろついた目で人のことじろじろ見て、囁みつきそうな顔で話せばあさんだつたとしても、惚れてるんじゃないかね」

なぜかは誰にもわからないが、クラウドはときどき、その気がないのにひどく核心をついたようなことを云い、ほとんど予言まがいの発言をしてのける。たとえば彼がハーメイン教授のことを、囁みつきそうな顔で話せばあさんなどと云わなかったら、このハーメイン教授はもう少し穏やかな、穏健な学者らしい風貌をしていたのではないかと、セフィロスは考えずにいられないのである。

ハーメイン教授は確かにおっかないおばさんであった。少し飛び出したような、すごい目つきといえる厳しい目つき目の目をしており、背が高く太った六十がらみの女性であった。声は低くすごみがあつて、これで色の薄い金髪を丁寧ていねいに頭の後ろで団子にまとめているのでなかったら、ほとんど怪物といつてさしつかえなかつたかもしれない。

だが彼女はやはり知的で、非常に文化的な婦人であつた。セフィロスと握手をし、なんだか冴えないような中年男の助手に向かつてお茶をお出しするように命令して、応接室のソファに落ち着いたあとは、彼女はぐつと雰囲気ふんいきを和らげて、鋭い知性と知的好奇心のあふれる顔をセフィロスに注いだ。

「プレジデントから連絡をもらったときは驚きました。彼がわたしになにか云つてよこすなんて、ほとんど十年ぶりくらいでしたから。あの人は、一度軌道に乗つたプロジェクトにはもう興味がないのね。常に次のもの、新しいものを追いかけて……それが実業家というものなのかもしれないけど」

「学問の世界からすれば、人間の経済活動が実に浮ついたものに見えることは理解できます」
そう云つたセフィロスを、ハーメイン教授は興味深げにしげしげと見つめた。

「そうだとしたら、それは人間が本質的に浮ついたものだからでしょう。わたしは学生によく云うんです、学問はのろまな亀だとね。スマートなウサギを目指したいなら、事業や金融といった経済活動に携たづなわらなくてはダメだと。そしてたいいていの学生はそつちを選びます。わたしは

それでいいと思っているし、学者なんてものがやたらにいる世界なんて、退屈で野暮つたいだけでしょう」

セフィロスは自分が何年も前から慣れ親しんでいる、非常になつかしい、親しいものが、いま目の前に生きた人間としてあらわれているのを見て、なにやら不思議な感動をおぼえていた。ハーメイン教授は、その話し方も軽妙でひねりの利いた文章そのままのような人であるらしい。このような女性から、あんな文章が生まれるというのはまったく自然なことであるわけだ。セフィロスは十代のころから、ハーメイン教授がミッドガルの小さな独立系報道誌『われらのニュース』に連載している「古代種文明と現代」というコラムの熱心な読者だった。その連載第一回目の文章を、セフィロスはそらんじているくらいだ。

「一九六二年の夏、漁の途中で嵐に見舞われて海に流され、無人島に流れついたひとりの漁師がいた。彼は飲み水と食べ物求めて島をさまよっている途中、島の洞窟の中に大きな壺がいくつも置かれているのを発見した。壺は嚴重に封がされ、中には紙の巻物が大量に入っていたが、不思議なことに巻物は少しも劣化していなかった。研究者たちが早速周辺の島々を含めて調査した結果、驚くべきことに、こうした古代写本がミディール諸島一帯の無人島に散らばっていることが判明した。これら一連の写本の発見がなかったら……研究者はこれらの写本をまとめて南海写本と呼ぶ……古代種の存在はいまだに伝説のままだったろう。

それまでこの種族は、ほとんど伝説上の、あるいは神話上の人々と考えられており、かつて

この星に実在していた人々とは思われていなかった。その遺跡や痕跡は、確かにそこら中にあった……巨大な神殿や劇場、各地に伝えられていた伝承などは、彼らが実在の人物であることの証のように見えたが、それらの文明はわれわれのものとはあまりにもかけ離れたものであり、ある点ではあまりにも進んでおり、またある点ではあまりにも遅れていた。人々はそれをどう考えるべきか、どう解釈すべきかわからず、二千年近くものあいだ、ただ放っておいたのである。

古代種……彼らがどのような人々だったのか、どのような言葉を話し、どのような文化を築き、どのように生きまた死んでいったのか……そうしたことは、まだ解明の途中である。けれども彼らはわれわれ現人類の偉大な先達であり、われわれは彼らから多くを学べるはずだ。まずは写本に書かれた古代種の文字を解読すること、それが当時わたしに下された使命だった。わたしはそれに邁進してきた……ここにお届けするのは、その苦闘の記録と、その結果わたしに芽生えたいくつかの粗末な思索である……」

こんな文章を彼女自身のおつかないまなこや引き締まった唇に重ね合わせていけば、そこにあらわれるのはひとりの経験を積み成熟した女性、優しさやユーモアや慈悲を職業的仮面の奥に隠して、表向きはあくまで学問に邁進する女性、要するに、ひとりの年齢を重ねた尊敬すべき学者があらわれてくる。そして人間というのは多かれ少なかれ皆このようなものだ。いやおうなしに経験を積んだ学者、経験を積んだ軍人、経験を積んだ妻、経験を積んだ夫、などなど。

ハーメイン教授は、興味があるなら大学や研究所内を案内してもよいと云つてくれた。セフィロスはぜひお願いしたいと云い、教授とともに立ち上がった。

「この小さな島が研究島として開発されたのは一九七二年、いまからおよそ三十年前のことです。最初は小さな研究施設があったのですが、大学が併設されるようになったのが一九七八年、研究島の開発が完了したのもだいたいその頃です。神羅が当研究所を作った目的は、おもに南海写本の研究をはじめとする古代種文明の調査と解明でした。だからこの研究施設は、古代種文明の研究を主とする人文系部門と、それを科学的見地から研究する科学部門と、大きくふたつに分かれているわけ。大学もそうです。研究施設も隣り合つてはいませんが、建物は別になっています。いまあなたがいるのが、文系の研究棟ね。そしてこの建物を出ると左手に見えるのが科学研究所。ほら、同じような建物が建っているでしょう」

ふたりはちやうど正面玄関をくぐつて、明るく乾いた日差しのもとへ出てきたところだった。彼らがいま出てきたような、真つ白な研究施設がふたつ並んでいる。無味乾燥な白というより、日差しを浴びて映えるための白だ。大きなガラス窓や丸っこい近代的なデザイン屋根をそなえているためか、神羅の研究施設というものの新しい感じはなく、圧迫感もない。

「このふたつの研究施設を中心として、大学の校舎、食堂、売店、図書館や事務所などが配置されているの。建物の数は多いけど、あなたに教えておかなければいけないのは図書館くらいかしら。敷地の奥のほうにエフロギア島古代図書館というのがあるのだけど、主要な古代写本

はみんなその閉架書庫に保管されているのよ。入つてすぐの開架書庫は誰でも自由に出入りできるけど、閉架書庫に入るにはわたしの許可と専用のIDカードが必要です。閉架書庫の書物を見るなら、閲覧記録や閲覧時間も事細かに記録してもらふ必要がある。あなたにはおわかりでしょうけど、古代図書館の蔵書は貴重などという言葉ではとても足りないほど貴重な、この星の歴史が生みだした宝物ばかりだから。古代種たちは、ほんとうに信じがたいほどの美的感性の持ち主でした。その写本の美しいことといたら！ どうやってあんな色彩を生みだし、それがいまだに保っているのか、まだよくわかっていないの。どんな染料を使ったのか、どうやって描いたのか、ほとんどなにも。紙の材料さえもわかっていない。どうやらわたしたちの知らない植物を使ったようなの……」

そう云いながら、ハーメイン教授はメインの施設からは少し離れた図書館へセフィロスを案内した。世界各地に残されている古代種の遺跡に敬意を表しているのか、その建物は古代の石造りの神殿を思わせる外観をしている。

「ここは正面の入り口だけど、IDカードを持っているなら裏口から入ったほうがいいわ。そのほうが目立たず出入りできるでしょう。あなた、女学生に見つかりでもしたらひと騒動起きそうなもの」

教授はセフィロスをちらりと眺めてちよつと皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「あなたにはゲスト用のIDではなくて、教職員用のIDを発行することにします。それなら、

学生たちと同じ出入り口から出入りしたり同じ廊下を歩いたりするような事態が避けられるでしょう。さあ、ここが図書館の裏口、専用のIDカードが必要な出入り口ね。カードはここにかざしてちょうだい。入って右側が事務室です。左側が閉架書庫の入り口。訪問者は否応なく監視カメラに録画されるうえ、入退室もすべて記録されます」

教授はきびきびと説明をつづけながら廊下を進み、左側にある書庫へと続く扉の前で立ち止まった。扉の横の壁に、カードリーダーが赤く点灯して存在を主張している。教授がカードをかざすと、解除音が鳴り、緑色の点滅がはじまった。

「無効なカードを三回検出すると、建物全体にロックがかかるように設定されているのよ。厳重なセキュリティと利便性の両立は悩ましい問題だわ」

ものものしく開いたドアをくぐりながら、教授は嘆いた。

「神羅製の建物はどこも外部に漏らすことの許されない機密に満ちていると見えますね」

「そのようね。やがてそれが長じて、情報だけではなくて、その情報に触れる人そのものが機密になってしまう。こんなやつかいなことはないわね。人間はなにをするかわからないし、動物や書類のように縛りつけておくわけにはいかないから」

互いに機密を知る者どうし……あるいは機密そのものどうしと云えばいいのだろうか？ ハーマイン教授もおそらくこの研究島の責任者として存在そのものが機密めいているはずである。セフィロスの存在は云うまでもない。プレジデントはなぜ、自分がハーマイン教授に面

会することを許したのだろうか？ 単純な好意やねぎらいの意図ならいいが、あのたぬきじじいがそんな単純な動機でものごとを進めるはずがない。そもそもプレジデントはなぜこの島をわざわざ推薦したのか？ 「タイムゲーネ」の復刻上演をセフィロスが観たいだろうと思つて？ セフィロスの古典悲劇や広く文学への傾倒を理解して？ それも確かにあるだろう。もしかするとほんとうに、単純な慰勞の気持ちからかもしれない。わからない。あのじじいの考えていることは、ときどきあまりにも複雑すぎ、ときどきはまたあまりにも単純すぎる。

「さあ、ようこそ、知の迷宮へ。ここ二千年の人類の歴史に先立つ古代種たちの叡智を集めた、原初の知恵、太古の英霊の宿る墓場」

ハーメイン教授は天に届けとばかりにそびえたつ無数の書架を前にして、少々芝居がかった声で云い、謎めいた微笑を浮かべた。

セフィロスは思わず感嘆の息を漏らす。知よ、知よ、人間の神へと至る試みよ！ そこは正しく迷宮だった。背の高い書棚は建物の壁に沿って円形に並べられ、部屋の中央にはらせん階段、三階まで吹き抜けになった各フロアは建物の周縁にそつて書棚の円を描いている。その頂点を為す丸天井には、円の中に描かれた創造主とその使徒たちが、吊り下げられたシャンデリアの明かりを受けながら、この迷宮をうろつく者たちを超然と見下ろしているのである。

「この建物を設計したのはわたしの大学の同期でね」

教授はセフィロスの視線をたどり、彼の見つめる天井を見上げて微笑んだ。

「わたしは抗議したんですよ、古代種の世界には創造主など決していなかったし、ましてその使徒などという存在もなかったとね。古代種たちの場合には、彼らそのものが母なる星の使徒であり、母なる星の協力者だった。権威主義的な選別や序列の思想などそこにはなかった。ご覧なさい、あの男だらけの絵。こんなに古代種たちの思想に反するものはない。でもね、設計者はこう云ったのよ」

教授は皮肉っぽく唇をゆがめた。青い目が知的な輝きにきらめいた。

「いや、図書館などという存在がそもそも人間的であり父権的であり家父長制的ではないか、と彼は云うの。知を求めることは外的な男性的な運動だと云うのね。古代種たちは知を求めたのではない、すでに知っていたのだ、というのが彼の持論なわけ。古代種たちは真実に自然の一部、この星の一部だった、それから外れたのはわれわれ人間だけだ、この権威主義的で暴力的なわれわれ人間だけ……それというのも、自然から切り離されたとき、われわれは知を自己の外に求めざるを得ないものになり、知を独占する者が世界を支配する者になった。図書館など建てる人間に、古代種をほんとうの意味であがめる資格などない、せいぜい神をあがめるがいいと彼は云ったわ。わたしは笑ってしまっただけ、確かにそうねといったのよ」

セフィロスはこの教授の話を長く心にとどめていた。IDを付与され、このIDで出入りできる場所とできない場所とを教えてもらい、いつでも好きなときに図書館を利用してもらってかまわない、規則に従ってくれさえすればいちいちわたしの許可を取るには及ばないと云って

くれた教授に幾重にも礼を述べてから、セフィロスはたくさんのおもちやを前にした子どものように興奮で顔を輝かせ、手をこすり合わせてあたりを眺め回したのであるが、それにもかかわらず、頭の片隅に教授のこの言葉がいつまでも残っていた。知は神であるか、それとも人間的なもののみであるか。どちらかわからない。どのみちセフィロスは神ではない。神でないものだけが知識を必要とするのだ。神でないものだけが、自分の外に自分のまだ知らぬものを見出す。あるいは、それらを通じて自分自身のうちに、であろうか。外に向かって呼びかけながら、自分に跳ね返ってくる精神のこだま。はるかな叡智の声。

この圧倒的な書物の山を前にして、セフィロスは無意識のうちに問いつづけていた。知よ、おまえはおれになにを知らせようとするのか。おのれ自身よ、おまえはなぜかくも知ることを求めるか。

迷宮を脱し、精神の宮殿から喧噪と対立とにまみれた地上へ降り立ったとき、セフィロスを迎えたのは、ミロス氏の友人という、無口な運転手ニコラオス氏だった。ミロス氏の話では、ニコラオス氏はかつて、ミロス夫妻が奉公していたゼノス家で運転手をしてきた時期があるが、諸般の事情により家族とともにいったん島を離れることになり、数十年後に戻ってきたときにはひとりきりだった。そのころゼノス家の最後の当主はもう世を去っており、島は魔晄炉と神羅の資本によって動く観光地へと様変わりしていた。ニコラオス氏は個人タクシーの運転手に

なり、ミロス氏はこの孤独な男をあわれんで、なにかというお客をつけてやったりした。だも
んですから閣下、この島での移動にはニコラオスの車を呼んでやつてくだらんでしようか：
ニコラオス氏はひと言も口をきかない代わりに、いつもなにか深遠な笑みを口もとに浮かべ
ていた。その顔を見たとき、セフィロスはここにもまたひとりの、世俗を超越した人間がいる
ことを知った。

ニコラオス氏の運転する車に揺られて、海風になぶられながら本島と研究島とのあいだに渡
された橋を渡り、海岸沿いを走って当座の我が家にたどり着いたとき……そこにクラウドのい
るのを見出したとき、なぜセフィロスの精神は今日一番の安息と平安とを見出したのだろう。
クラウドはミロス氏とふたり、家の前でなにやら議論していた。ふたりは家の周りにセフィロ
ス専用の花壇を作る計画を立てているのだと云った。

「あなたが花に水をやりたいかと思つてさ」

とクラウドは云つたのであるが、その言葉の中におよそ人の人生というものが凝縮されてい
る気がしたのはなぜだろう。確かにセフィロスは花に水をやりたかつた。朝目が覚め、カーテ
ンを開けて日差しを浴び、花に水をやるような生活が彼はなぜか無性に恋しかつた。そして同
時に、彼は早くも知の迷宮へ舞いもどる自分を夢想していた。

「しかしおまえはどこへ行つてもなにかしら労働をしているな」

セフィロスは、耳に鉛筆をはさんでミロス氏とセメントの手配の話をしているクラウドを微

笑ましく見つめた。

「仕方ないだろ。おれじつとしてるの耐えられないんだもん。貧乏暇なしって言葉知ってる？」
クラウドはどこか軽蔑したように云った。その生意気な顔つきの中に、地べたを這い回り、額に汗する地の民の誇りが見え隠れするのは、そしてそれが無性に輝かしいのは、いったいなぜであろう。

4 文学的な死体

七月二十九日 日曜日 〳 七月三十日 月曜日

日曜の朝だというに、本来休みであるはずのミロス氏が別荘のドアを叩いたというのは、よほどのことである。

日曜日はミロス夫人も休みであった。別荘の住人二名は慈悲深き夫人に見放され、罰として冷たい料理ばかり食べなければならぬ日だった。もともと、夫人は土曜日には二日ぶんの食事をこしらえて帰る……大鍋で煮たスープや、温めればいいだけの作り置き料理を冷蔵庫にたくさん仕込んで帰ってくれるのである。ところがクラウド・ストライフなる名うての大喰らいが、これを日曜の昼過ぎにはあらかた食い尽くしてしまうのだった。

クラウドのこのたいそうな食欲は、エフロギア島においてのみならず、ミッドガルにおいて

もひとりの善良な婦人を困らせていた。セフィロス宅のハウスキーパーをしているグロリア未亡人はあるとき、いつの間にか食料がどこかへ消えてしまうのを不審に思い、ねずみがいるのではないかと疑った。セフィロスがそれはプシーカルパクス（「パン切れを盗む者」の謂、前五世紀ごろの「カエルとネズミのねずみ」なる、ホメロス「イーリアス」の動物版パロディに登場する）というねずみで、旺盛な食欲を持ち、しじゅう腹をすかせているので、あちこちで盗み食いをするのだと云うと、善良な未亡人は信じてしまい、あやうく駆除業者を呼ぶところだった。おかげでセフィロスは未亡人にこっそり絞られたが、以来クラウドは「我が家のプシーカルパクス」という新しい、由緒ある名前を頂戴することになったのである。

ミロス氏がドアを開け飛びこんできたとき、プシーカルパクスは朝食を終え、居間のソファの上で、腹がふくれた満足に浸りきっていた。セフィロスは物憂くピアノを鳴らしていた……彼の頭には、数日前からなぜかあるひとつの物憂い旋律が、くり返しくり返しなにかを主張するように浮かんでいた。セフィロスは作曲などということをもうずいぶん長いあいだしていなかった……基礎的な音楽の教育を受けたとき以来ではないだろうか？ プレジデントのあてがった教師は、高慢な高い鼻をもつ、感傷的で高飛車な、痩せた男だった。どこかの音楽院の教授だとかで、人格には難ありだが、音楽への情熱は本物だった。その教授があるとき云ったのである、音楽は詩です、わかりますか、と。

「お休み中のとこ申し訳ありません、閣下」

ミロス氏はやはりセフィロスと話すときは、昔の歩兵時代のくせが忘れられないのだ。彼は

ぴんとなり、あやうく敬礼すらしかけるのである。

「ですが、こいつはどうも閣下にお知らせしなけりやなんねえ、つてわしも思うしうちの女房もそう云ったですよ」

ミロス氏はやや興奮していた。

「こういうことです……閣下はご存じでしょうが、島の南の岬に灯台があつて、その少し先にタイムゲーネの岩ちゆうて観光名所になつとる岩場があるです。今朝早く、その岩の上で男がひとりひっくり返つておつ死んでるのが見つかったです。それがどうも、神羅軍の軍人さんらしいちゆうこつて、首にあの、ペンダントみてえにぶら下げる銀色の……そうそう、その認識タグです、そいつをぶら下げとつたで、神羅軍の軍人さんだちゆうことがわかつたです。頭ぶん殴られて殺されたらしい、ちゆうこつて、島じゆう大騒ぎだですよ」

「なんと」

セフィロスは芝居がかった仕草で両手を挙げた。

「わしも詳しいことはわからんですが、もうすぐなにかしら発表があるに違いねえです」

ミロス氏はうなずいた。セフィロスはしばらく顎に手を当てて考えこみ、ぼつりと云つた。「この島では、誰が事件事故の捜査をするのだろう」

「憲兵です、閣下」

ミロス氏がうなずきながら応えた。

「いまごろ憲兵隊長が、予審判事とあれこれ相談しあつとるでしょう」

「あんた、なに考えてる？」

クラウドがセフィロスをとがめるように見つめて云つた。

「いや、……いつたいこの事件ないし事故の管轄はどこになるのだろうかと思つてな。死んだのがうちの軍人とあつては、軍の捜査局が黙つていないような気がする」

「……あんた、もしかしてそこの偉い人とかと知りあいな？」

クラウドの目は細められて非常に険悪になつた。

「局長とは知りあいといえば知りあいたが……」

セフィロスはまだ考えこむような顔をしていたが、しばらくして首をふつた。

「やめよう。なぜおれが気をもまなければならぬんだ。おれは休暇中だ」

「えらい」

クラウドはうなずいて、セフィロスをほめた。

「あんたみたいになつて、ぼやぼやしていると休みが休みじゃなくなるんだもん、そういうのよくないよ」

「えらい」

今度はミロス氏がクラウドをほめた。

「それとおりで。責任のある仕事をしとる方つてのは、どうも四六時中仕事だかなんだかわ

からなくなつていけねえ。お亡くなりになつたわしのご主人もそうだったですよ。軍にいたあいだは、それこそ自分のケツを拭くひまもなかったようなもんだつたです。わしやしよつちゆう云いましたよ、はばかりながら申し上げます、少し働きすぎであります、つてなもんで」

「女房役に恵まれた男は幸福だ」

セフィロスは微笑み、ミロス氏がいなくなつてから、自分の女房役の頭をやさしくなでた。

ニュースはその日のうちに島を駆けめぐり、地元紙「エフロギア島新聞」は号外を出した。

本日、七月二十九日午前四時半ごろ、エフロギア島灯台近くの通称「タイムゲーネの岩」の上で、仰向けに倒れている男性の遺体が発見された。発見者は近所に住む漁師ヴェニゼロス氏で、深夜の漁から帰つてあたりを散歩していたところ、岩の上に男性の遺体があるのを見つけた。ヴェニゼロス氏は灯台に居住している灯台守スタブロス・シシニス氏に助けを求め、シシニス氏は憲兵隊に通報した。

亡くなつたのはミッドガル在住の陸軍中佐ジョーゼフ・モロー氏（四十八）であり、妻と息子とともに今月二十二日から島のホテル・ネクタルに宿泊し、休暇を過ごしていた。モロー氏は二十八日の午前八時半ごろ、息子のジェレミー君（十五）を連れてホテルを出、ミデイールのヴィラに滞在している友人のもとへ向かい、終日友人たちと過ごしたあと、島へ戻る定

期船の最終便に乗船したことが分かっているが、それ以降の足取りは不明。また、ジュレミー君の行方もわからなくなっている。

二十九日午前四時ごろ、モロー氏の妻から夫と息子が帰ってこないと言われ、憲兵隊に相談があり、遺体の発見はその直後のことであった。

憲兵隊によれば、モロー氏の死亡推定時刻は二十八日の午後十時から十一時にかけてのあいだと見られ、死因は右側頭部を強打したことによるものとみている。ジュレミー君の行方がわからなくなっていることから、父子ともになんらかの事件に巻きこまれた可能性があるものとみて捜査を進めている。

憲兵隊長ヤニス・ファノラキス氏の話。「事件はまだ発覚したばかりであり、ほとんどなにもわかっていないが、第一に優先すべきはジュレミー君を探しだして無事保護することである。現在、下船後の父子の足取りを懸命に追っている最中であるが、よりによってバカンス中にこのような不幸に遭遇しなければならなかったモロー夫人には心よりお悔やみを申し上げます」

予審判事ダン・マルキール氏の話。「モロー中佐の死が不幸な事故であり、息子のジュレミー君がなにかの行き違いでどこかに滞在しているだけであることを願うが、迅速かつ慎重な捜査が求められるものと理解している。万が一これが事故でなく事件であった場合、この島においては稀なケースとなるが、ファノラキス隊長はすぐれた指揮官であり、経験も豊富

であるため、安心して任せることができると考えている」

「この十五の息子とやらが気にかかる」

セフィロスは浜辺のビーチチェアに転がって、号外を広げながらぶつぶつ云った。美しい夕日が海の向こうにかかり、世界を黄金色に染めあげていた。クラウドは海で泳ぎながら、海面から出てきたりまた潜ったりしていた。

「微妙な年齢だ。もう少し小さければ行方不明になる原因などいくらでも転がっているし、もう少し大きければ自分でいなくなった可能性もあるが」

号外にはモロー中佐とその息子のあまり鮮明でない顔写真が載っていた。たぶん軍の身分証から拝借した写真を使ったのだろう、中佐はしゃつちよこばった生真面目な顔をして制帽をかぶり、まっすぐに前を見つめている。息子のジェレミーは美しい少年だった。きつと母親が美人なのに違いない。なんとなく無骨な軍人タイプ父親と並ぶと、息子のほうは非常に繊細でまったく異なった顔のつくりをしているのがわかる。唇をぎゅつと噛みしめ、カメラに挑みかかるような目つきをしており、意志の強そうな、聡明そうなまなざしである。

「知ってた？」

クラウドは海面から金髪頭を出して云った。

「おれ、そいつとひとつつきや違わないって」

「ああ、それもとても信じられないことのひとつだ」

セフィロスはため息をついて、クラウドを眺めた。

「おまえの歳のことを考えると、おれはときどきめまいがしてしまう。おまえを前にすると、おれはつい年齢のことを忘れてしまうんだ……そして思い出すたびに愕然とする。特にこんなふうに、世間における十五、六の子どもに接する機会でもあると」

「おれの考えじゃあね」

クラウドは水のなかで微笑んだ。

「その歳でガキかどうかは人によるよ」

セフィロスはクラウドに手招きした。海から上がってきたクラウドを、セフィロスはタオルにくるんで自分の膝の上に座らせた。クラウドは号外をのぞきこんだ。金髪頭から、水滴がぼたぼたと紙面の上に落ちた。

「それで、同年代のおまえの感想は？ このジェレミー少年はガキだろうか、それともそうではないだろうか」

へたりこんだ金髪から水をしたたらせ、クラウド・ストライフは鼻先をつんとさせて、しばらくジェレミー少年の写真を見つめていた。彼は背中をぼりぼり掻き、やがてその口もとに、独特の皮肉げな微笑が浮かんだ。

「おれ、こういうやつ嫌い」

クラウドは指先でジェレミー少年の顔をぴんとはじいた。

翌朝、ミロス夫人が張りきって朝食の仕上げにかかっている朝の八時少し前、ノリス氏から電話がかかってきた。

「プレジデントから電話がありました……」

相変わらず陰気で沈んだような口調だった。

「自分のところへ電話をかけてくれるようにとのことです……今日は一日社長室にいるそうです……」

スピーカー越しにノリスの陰気な声を聞いていたクラウドの目が、にわかに険しくなった。セフィロスが受話器を置くと、クラウドはセフィロスをにらみつけた。

「電話するの？」

「しないでいられると思うか？」

「だって、なに云われるかわかったもんじゃないよ」

クラウドは唇をとんがらせて云った。

「なにも仕事の話とはかぎらないさ。プレジデントの持病の水虫が悪化して、すっかりご臨終というところまで進行してしまったのかもしれない」

「あのためきじじい、水虫なんだ。ざまみろ。毎日蒸れた靴下はいて、足がぐちゃぐちゃにな

ればいいよ」

夫人がテーブルに朝食を運んできた。ふたりはまずそいつを片づけにかかり、食事がすむと、セフィロスはプレジデントに電話をかけた。社長秘書のボディミッド嬢が、相変わらずの凄みのある声で電話に出、セフィロスと知るやすぐさま社長につないだ。ボディミッド嬢は仕事とあらば、セフィロスだろうがパルマーだろうが同じように扱うことのできる稀有な人材だった。「わしだ……どうやらごねないで電話をくれたものと見えるな……」

電話の向こうで、プレジデントは微笑んだに違いない。

「わしの別荘はどうだね……」

セフィロスはたいへんよいと云い、特に庭がすばらしいが、プレジデントはきつと興味がないだろうと云った。

「あいにくわしはきみと真逆の人間なのでね……わしには水道や冷暖房といった設備のほうが大事なのだ。そのへんは買いつたときだいぶ手を入れたのだが、きみはどうせその快適さには気がつかないだろうな」

「連れが気がつきましたよ」

セフィロスは云ったが、思わずちよつと得意げになった。クラウドは自分の話をされて、誇らしくなるどころかかえってむつとした表情になった。

「事件のことは聞いたかね……死んだのが軍人だということも？　うちの陸軍の人間らしい

な……それで、本来なら陸軍捜査局に捜査権があるわけだが、なにしろこの終戦直後の騒ぎだろう。大勢そつちに駆り出されていて、人手が足りないのだ。局長が嘆きに来て、そういえばきみがそのあたりに休暇に行っていなかったかと云うんだ。ごまかすこともできたが、局長にはいくつか借りがあるし、今回の軍事作戦については、きみがもう少し早く参加してくれていたら状況は全然違ったはずだと局長は考えている……さすがにすべてきみのせいとまでは云わなかったがね。だが彼の云いたいことはわからんでもないだろう、きみだって……」

プレジデントの口調はからかうようでもあり、どこかいたわるようでもあった。

「責任をとりたまえよ、きみ。勝手な行動をとった代償を支払うのだ……局長とわたしの出した結論だが、お互いに情報提供しあうということを前提に、島の憲兵隊にそのまま捜査を続けてもらふことにした。島にはマルキールという予審判事がいるはずだが、これがわしの友人なんだ。彼にはきみがいるのでよろしくと云っておいた……休暇に飽きてきたら判事に会ってみたまえ。判事とわしの予感では、どうも捜査は難航するような気がするんだ……」

セフィロスは受話器を置いてしばし考えこんだ。そして顔を上げ、クラウドを見たが、クラウドはカンカンに怒っていて、彼の周りだけ温度が十度ほど上昇しているように見えた。

「あなたの休み、また休みじゃなくなつた」

クラウドは吐き出すように云つた。

「そんなことはない。休暇に飽きてきたら、とプレジデントが云っていただろう」

「そんなの、本気じゃないに決まってるだろ。なんだかんだ云うけど、あんた律儀だもん。それで、あのクソだぬき、あんたに云えばあとはなんとかなるくらいに思ってるんだ。そうに決まってるよ」

クラウドはまるでこの事態がセフィロスのせいだと云わんばかりに彼をにらみつけた。

「あんただぬきじじいの云うことなんかどうだっていいだろ。あんたとなんの関係があんの？」
「ないと云いたいのが、ある意味自分でまいた種なんだ」

セフィロスはもの悲しげに微笑んだ。

「しばらく前におれが出社拒否していたのを覚えているだろう。あのつけを払わされる羽目になつたのさ……」

セフィロスはクラウドに手を伸ばして、金髪頭を抱えこんだ。

「自由には大きな代償が伴う。この世の不変の法則だ。組織の中で我意を通そうとすれば、必ず誰かが被害を被る羽目になる。持っている力が大きければ大きいほど、その影響は甚大になる。局長はおれを責めているのさ。おれほどの力を持った人間が、忠実に自分の義務を果たし、あの北の小国に出兵していたら、混乱はこれほど長引かなかつたと局長は云っているんだ。もしかしたらその通りかもしれない。おれがああ陰鬱な北の大地を半日で焦土にし、あちら様の軍隊を皆殺しにしていれば、あの国には反抗する気力などなくなつたろうと局長は……それに大方の人間も……思っている。結局、おれの役割はそういうもので、おれはそういう存在だ。」

だがおれが渋ってなかなか出ていかなかったばかりに、戦争はむやみに長引き、反抗勢力が増長したのだと大方の人間は思っている。実際には話をもっと複雑なのが、そんなことは関係ない。おれが出ていけば敵は完膚なきまでに叩きのめされ、反抗など思いもよらなくなるというのが、神羅軍における勝利の定型なんだ。それを崩し、逸脱したおれはいわば組織の様式美を台無しにしたわけで、これを破壊するのは組織にとって反逆以上の罪なんだ。信仰体系の破壊のようなものだから……」

セフィロスは肩をすくめ、皮肉っぽく微笑んだ。

「どのみちおれは祭り上げられた神なんだ。最後の神頼みというやつで、自分たちの背後に神さまがついていてくださると思うから、神羅軍は増長し、膨張し、好き勝手に暴れることができる。ところがその神がえらく気まぐれで、役目を果たしたり果たさなかつたりしたらどうなる？ 民衆は怒り狂い、その神を祭るのをやめて引きずり下ろし、散々に呪って地獄へ追放するだろう。そういうものだ……神とはそういうあわれな存在なのさ。そのくせ、じゃあおれに代わるやつがいるのかというと誰もいない。だが民衆はそんなことなど考えもしない……それがこの世界さ。どうにもしようがない。そしておれはそれをあわれなことだと思う。まったく悲しい現実だ……この地上において、能力というものはひどく偏在しているらしいからな。持てる者はお与えられて余りあり、持たぬ者はその持てるものをも奪らるるなり。だがほんとうに力のあるのはどちらなのだろうな、持てる少数者か、持たざる多数者か。結局、なにも持

たず凡庸に生まれてくるのが一番いいのだろう。大手を振って自由を謳歌できるのはそういう連中だ。そして責任はすべて持てる者のものになる。自由にふるまうには、結局おれは力がありすぎるといふことなのだろう」

セフィロスはクラウドを見た。クラウドはうつむき、顔をしかめ、なにかを必死に考えているように見えた。

「こらこら、やめろやめろ、おまえが頭など使いはじめた日には、この世の法則がみな逆さまになつてしまう」

「冗談云つてる場合じゃないだろ」

クラウドはいらだたしげにセフィロスの胸を殴りつけた。

「だいたい、頭使わせるようなこと云うの誰だよ」

「おれだな、確かに」

セフィロスは認めた。

「だがおれに頭を使わせるようなことを云わせるのはおまえだぞ」

「おれたち、合わないんじゃない？」

クラウドはむくれたような顔で、致命的なことを云つた。

「おれが腹立てたりむかついたりするとき、あんたそれをみんな理屈にしてしゃべっちゃうんだ。んでそれ聞いているとき、おれなんだかわかんないけど、あんたがなに云つてるのかもわ

かんないんだけど、なんか納得しちゃうんだ。それで、気持ちのやり場ってやつがなくなっちゃうんだ。これっていいこと？」

セフィロスはかなり長いこと考えこんだ。

「わからない」

セフィロスは首を振った。

「肝心なとき役に立たないんだよな、あんたって」

クラウドはちよつと軽蔑したように云い、ソファから飛び降りて、台所へ食料を盗みに出かけた。

「それなら、ご面倒だが一度顔合わせというやつをやりましょう……」

受話器の向こうから、胸間声が聞こえてきた。

「現場をご覧になりたいですか？ それならファノラキス隊長と一緒に、十時にお迎えに上がります……現場が少々特殊でしてな、干潮時でなければ歩いて行けないのですよ。今日は十時五十六分に干潮なのです。そのあとご一緒に食事でもどうですか……迎えが着くまでに報告書をお読みいただく暇はありますか？ ある？ ではお送りしましょう……」

予審判事ダン・マルキール氏は、電話の向こうでそう云った。

セフィロスは出かけるのはいいがよそ行きを着るのが業腹だといい、クラウドは、よそ行き

なんてものを発明したやつは全身ノミシラミにたかられて、すぐかゆくなければいいと云った。そして着替えなどしたくないし、胴間声の判事や憲兵隊長などという人種と食事もしたくないと云ったが、セフィロスがそんなことになったら人生における貴重な食事の一回を、慰めも潤いもないものにする事になってしまい、とても耐えられないと泣きだしたので、しかたなく一緒に行つてやることにした。

セフィロスはホワイトボードに「マルキール判事と殺人現場へ。十時から。なにやら字面だけでもおどろおどろしい。帰宅時刻不明」と書きくわえた。それから大声でミロス夫人を呼び、昼食はいらないと伝えた。

「まあまあ！」

と夫人は寛大に云った。

「それじゃ遠慮なく、一食分楽させてもらいましょかね。あたしは腰が痛いですよ！ クラウドときたら一日に十人前も食べるんだもの、手なんかガサガサになっちゃいましたよ……」
そのクラウドはファックスがのんきな音を立てて書類をのんびり送ってくるのを見ていた。いまとなつてはアナログなこのやり方は、おそらく二、三十年前にはまだかなり活躍していたに違いないが、セキュリティを考慮した場合、結局いまだに電子メールより安全性が高いのだった。

音声データとなつてのんびりとやってきた報告書は、ファノラキス隊長の文責によるもので、

かなりの分量があつた。迎えが来るまでにはまだ時間があつたので、ふたりは明るさを求めて外へ出、レモンの木の横にあるベンチに座つて読むことにした。レモンのかぐわしい香り漂う中、プシーカルパクスはレモンを盗み、ナイフで半分に分けて、ミロス夫人の聖域たる台所から盗んできた炭酸水の瓶に果汁をしぼり入れ、ハチミツを盛大にぶちこんだ。そしてせつせと飲みはじめた。報告書にはこのように書かれていた。

一、人物

ジョーゼフ・モロー中佐（四十八）、陸軍実施部隊第五四砲兵連隊隊長。

「 μ 」— ε γ λ 一九五五年八月三日、カームにて出生。一九七六年、ミッドガル市建設にともない、建設作業員であつた父親とともに一家でミッドガルへ移住。同年神羅軍陸軍へ入隊。一九八七年、デライラ・サボーと結婚。翌年、息子のジェレミーを授かる。

デライラ・モロー（旧姓サボー、四十四）

「 μ 」— ε γ λ 一九五九年二月十日、キニジ村にて出生。キニジ村はカーム南東の東大陸奥地にある村であるが、この村は一九七六年、魔晄炉建設地となつたため神羅カンパニーの所有となり消滅、住民は近くの村へ移転した。父親のヘンリック・サボーは、この移転をめぐり、農耕地の補填を求めて神羅カンパニーに訴訟を起こしたメンバーのひとり。訴訟団は敗訴。一家は移転先へ移つたが、デライラ・サボーはこれを期に十七歳でミッドガルへ

移住。一九八七年ジョーゼフ・モローと結婚。現在、ミッドガルにて複数の雑貨店を経営、経営状態良好。なお、本島へやってきた二十二日から体調不良を訴え、ホテルの部屋から一歩も出ていないとのこと。

ジュレミー・モロー

「μ」—ε—γ—λ—一九八八年四月二十六日、ミッドガルにて出生。ミッドガル伍番街にある名門校として知られている高校に在学。本年六月に、深夜徘徊による補導歴あり。

二、事件の経緯

七月二十八日午前八時二十分ごろ、モロー親子は逗留先のホテル・ネクタルを出て、ミディール行きの定期船が出ている港へ向かった。港へは徒歩五分ほどだったので、ふたりは歩いてゆき、午前八時三十分発の定期船に乗りこんだ。午前九時三十二分、定期船はミディールに到着しふたりは船を降りた。

午前九時四十分ごろ、モロー親子はミディールの高級ホテル、ヴィラ・コクーンのフロントにて、三号ヴィラの宿泊客オーガスタス・リヤン氏への面会及び案内を請うた。ヴィラ・コクーンは独立型のヴィラが何棟か集まった高級ホテルである。

オーガスタス・リヤン氏（四十八）はウータイ出身。一九七五年、一家でミッドガル建設予定地へ移住、翌年神羅軍入隊。ジョーゼフ・モローとは同期であり、家族ぐるみのつきあいを

している親しい友人。十二年前に陸軍を退役、数人の仲間とともに富裕層向け民間警備会社を立ち上げ、現在も経営。ミディールへは今年二十五日から二十日間の休暇でやってきた。妻、息子、娘ふたりとともに現在もヴィラに滞在中。

オーガスタス・リヤン氏の話

「モローとわたしはなぜかとても気が合うんです。退役後も定期的に会って、家族で食事をしたりキャンピングをしたりしていました。今回はお互い、たまたま同じ時期に近場で休暇を過ごすことがわかったので、会おうということになっていたんです。ジョーゼフが来たのは確か九時半を過ぎていたと思いますが、出迎えて、挨拶して、お決まりのやりとりをして……元気にしてたかとか、仕事はどうだとか、そんなことです。わたしと妻とジョーゼフの三人はリビングのソファでしばらくおしゃべりしました。ジェレミーはすぐうちの子どもたちと一緒に遊びはじめたんだったと思います。彼はハンサムなので、娘たちはあの子が好きだし、息子は年上の彼を尊敬してるんじゃないかな。スマートで、大人びていて、ちよつとはすにかまえていて……人気者になるタイプですよ、ジェレミーは。父親とは違うタイプですね。ジョーゼフには若いころだって、ああいう斜に構えたようなところはなかったですから。苦労してきたせいかもしれません。」

わたしたちくらの世代でミッドガル出身といえ、たいいてい故郷で食いつぶぐれて、仕事

を求めて出てきた両親の子どもです……わたしも移民で、当時はほんとうに貧乏でした。でもあのころよかったことのひとつは、誰にでもチャンスがあつたことです。ミッドガルという街の建設がはじまつたばかりで、まだまつさらだつたころです、誰にでも成功をつかむ機会があつた。わたしは考えた末に軍に入り、こうして成功しました。それはジョーゼフも同じです。

あのころは神羅軍が急激に規模を拡大していた時期で、能力さえあれば誰でも将校になることができました。士官学校卒だとか、親が将校だとか、そんなことにこだわっている時代ではありませんでした……いまではコネも金もない一兵卒がチャンスをつかもうと思つたら、われわれよりもつと苦労しなくてはならないでしょうね。それこそソルジャーになるとか。それがあの職業が人気のある理由のひとつですよ。

話がそれましたね、すみません。わたしたちは一日ぶらぶら観光したり、温泉に入つたり、海で遊んだりして楽しみました。トラブルなんかなにも起きませんでしたよ。楽しく過ごしました。午後六時ごろ、一度ヴィラに戻り、それからレストランへ食事に行きました。食事を終えてヴィラへ戻つたのが午後八時ごろだつたと思います。当初の予定では、モロー一家は二、三日ヴィラに滞在することになっていたんです。ベッドルームが複数ありますから、問題はなかつたんです。でもモロー夫人の具合が悪くて寝こんでいるとのこと、ジョーゼフとジェレミーはその日のうちに帰ることにしていました。夫人の体調不良の原因ですか？ さあ、ジョーゼフはたぶん疲れていたんだろうと云つてました。モロー夫人は忙しい人ですからね。

夫人の経営する雜貨店はミッドガルでも有名だし、特にここ数年は店舗数も増えて従業員も増え、夫人はかなり忙しくしていたようなんです。夫人もこんなつもりじゃなかったというようなことを云っていたことがあります。一店舗かせいぜい二店舗、家計の足しになるくらいの収入があれば十分だったと。

いえ、でもね、モロー夫人がなにかやりはじめると、うまくいってしまうことが多いんですよ。あの人は頭のいい人です。ぼくは何度か彼女に経営上のことで相談したことがあるんです、お互い経営者でしょう？ そうすると、夫人は驚くほどこつちの仕事のことや経営状態を理解してくれて、こうしたらどうかとか、この経費は削れないのかとか、的確なアドバイスをくれました。しかもすごくきれいな人なんで、正直、ジョーゼフと彼女が夫婦でいるのが不思議なんです。でも夫婦のことってわからないでしょう？ 愛し合っていたのは確かです。ジョーゼフは夫人を崇拜してました。夫人もジョーゼフを好きなようでした。きっと、ジョーゼフの人柄にほっとするんだと思いますよ。ジョーゼフは裏表のない、どっちかというと単純なやつです。一方夫人のほうは、故郷がなくなつてミッドガルに出てきて、きつと苦勞してきたに違いないですから。

また話がずれましたね、二十八日のことに戻しましょう。ジョーゼフとジェレミーが帰る時間になると……ええと、午後八時半前でした。たぶん八時二十分くらいかな。定期船の最終便が八時三十分に出ることになっていたので、わたしたちは港まで見送りに行き、船が出るのを

見送つて、帰つてきました。どうせ休暇はまだしばらくあるから、また来るよとジョーゼフは云いました。そのときは一緒に釣りをしようなんて話もしました。それがあいつと話した最後です……信じられません、ジョーゼフが死んだなんて……だつてジョーゼフは人に恨まれるようなタイプじゃありませんよ、絶対に。ほんとうに優しいやつなんです……事故でないなら、強盗に遭つたとか、誰かに間違われたとか、そういうことに決まつてます……」

なお、オードリー・リャン夫人も、ほぼ同じような証言をしている。

リャン夫妻の息子オリバー君(十三)は、ジェレミー君についてこのような証言をした。

「浜辺でみんなから離れてふたりで遊んでたときのことです……ぼくたちふたりとも、うるさい妹たちにつきまとわれるのにうんざりして、ようやくふたりきりになれたんで喜んでました。ジェレミーは、ぼくにジェレミーの学校で流行つてる遊びを教えてください、みんなにダサイと思われないために知つてなきやいけないことを教えてくださいました。服の着方とか、音楽とか、動画とか……ジェレミーの云うとおりになると、みんな一目置いてくれるんです。ジェレミーつてすごく頭がよくて、どうすればいいかなんでもわかっちゃうんです。で、ぼくたちそういう話をしてただけで、ぼくが、うちは休暇のあいだお父さんがデジタル断ちするせいで、ネットができないから、流行りに遅れちゃうつて文句云つたんです。そしたら、ジェレミーがこう云つたんです。父親つてそういうもんだよ、ぼくも苦労してる。でも、最近ちよつと変なことがあつてさ。」

変なことって、どういうこと？　ってばく訊きました。そしたらジェレミーは、ちよつと苦笑いみたいな顔して、

『そのうち話すよ。たぶん、次に会ったときにでも。うちの父さんと来たら、ぼくにもつと真面目になれとか、しつかり将来のことを考えろとか云うけどさ……ぼくだつていろいろ考へてるんだ。父さんとは違うだけだね。そういうの、わかつてもらはうのつて難しいよ。でも……まあ、とにかく今度会つたとき話すよ』

ジェレミーとお父さんは、別に仲が悪いつてわけじゃないです。たまに考へが合わないときがあるつてジェレミーは云つてたけど、別に嫌いとかそういう深刻な感じじゃないです。だつて、モロー中佐はとつてもいい人です。ぼくたち、いつも中佐に会えるの楽しみにしてたんです。毎回おみやげをくれて、一緒に遊んでくれました……木にすぐ早く登れるし、連続で宙返りできるし、蛇みたいに地面をくねくね這つて進んだりできるんです。ぼくたち、中佐と友だちみたい遊びました……ジェレミーは、あんまりそういう遊びには加わらないけど』

定期船最終便はその日の午後九時三十五分、エフロギア島に到着。下船後の親子の足取りは不明。モロー中佐の死亡推定時刻は、七月二十八日の午後十時から十一時にかけてのあいだで、死因は右側頭部強打による脳出血、傷口には微量ながらごく小さな岩の破片が付着していた。傷の角度や大きさなどから、背後から故意に撲殺された可能性が高く、右利きの人物による犯

行と思われる。

遺体のあつた通称「ティムゲーネの岩」は岬の先にあるいわゆる離れ岩で、岩の高さは約二メートル、縦横三メートルほど。干潮時にはあたり一帯の水が引いて、岩礁地帯を歩いて岩のあるあたりまで行くことができる。当日は午後十時三十一分に干潮であつたことから、中佐はこの時刻の前後に殺害された可能性が高い。港から現場までは車で三十分ほどかかるため、移動時間などを鑑みると、ほかの場所で殺されて岩の上に置かれたとは考えにくく、この岩の周辺が殺害現場と思われる。

遺体の所持品はネックレス型の神羅軍の認識タグのみ。モロー夫人の話では、左手首に腕時計をはめ、財布と携帯電話をもつて出たということだが、いずれも紛失している。財布にはそれなりの額の現金やカード類が入つていたと思われ、時計は高性能なもので高級品だつた。貴重品目当ての強盗の可能性か。あるいはジェレミー・モローが所持している？

遺体の第一発見者ヴェニゼロス氏の証言

「二十九日は朝の……おたくさんにすりや夜中のかな……三時過ぎに漁から戻つてきて、すぐ家に帰るはずだつたが、一緒に働いてるやつと喧嘩しちまつて、むしろくしゃしとつたで、腹鎮めるためにあたりをしばらく車で走つとつただよ。海岸沿いをなんとなく灯台のほうへ走つていったが、ありやたぶん四時頃でねえかなあ、あたりがうつつすら明るくなつとつて、ふと、

カモメの野郎が変にぎやあぎやあ鳴いとるで、ずいぶん妙な具合に鳴きやがると思つてよ。おりやあ車停めて、鳴き声のする海の様子を見た。そしたら、例のよきつと突き出た岩の上に、どうもなにか乗つかつてるらしく見える。んでその上のあたりを、カモメの野郎が数羽鳴きながら飛び回つとつた。

おりやあ目をこらしてよつく見てみた……昔から目だけはいいでなあ、ほかはさつぱりだが、これだきやあ、おつかさんにも褒められたもんだ。そしたらよ、やつぱりなにかが岩の上に乗つかつとる。考えてみりやちようど満潮どきだ、最初はなにかの魚が打ち上げられたのかと思つた……でもそれにしちやあ形が妙だ。犬だの猫だのにしちやあでかすぎる。おりやあなんだか嫌な予感がしてきやがった。カモメつて野郎は死骸をつつくのが好きでよ、悪いやつらじゃねえが、気味が悪いちゆう人がいるのもうなずける。ありやきつと、なにかがあすこでおつ死んでるのに違いねえ、ひよつとして人間だつたら……そう思つてよ、灯台のすぐそばだつたんで、シシニスじいさんに相談してみることにした。じいさんのことだ、四時過ぎりや起きてるだろうと思つた。あの人はこういうときにや頼りになるんだ。

おれが灯台のそばまで来ると、じいさん案の定起きてて、家からどこかへ向かうところだつた。おれはじいさんに声かけて、頼むから一緒に見てくれ、ちゆうてじいさんを引っぱつて例の岩のほうを指さしたんだ。したらじいさんも、こいつはなにか乗つかつてるつて認めた。んで家に引き返して望遠鏡とつてきて、そいつを覗いて見たところが、人じゃねえか、ちゆうんだ。

おれも貸してもらつて見たが、やつぱり人が仰向けに倒れてるみてえに見えた。カモメの野郎はぎやあぎやあ鳴いてやがった。いまにも、誰だか知らんがあの人の内臓に食らいつくんじやねえかと思つてよ、おりやあ、早く憲兵隊に知らせてくれろよじいさん、ちゆうた。じいさんはおれに、ここで待つてろ、ちゆうとすぐに家ん中飛びこんでつて、電話かけてまた出てきた。おたついたつてしようがねえ、いまはちようど満潮だ、あすこへはボートかなにかで回りこんで行くしかねえ、憲兵隊を待つたほうがええ、つてじいさん云つたんで、おれもそう思つた。おれらがしばらく待つてると、憲兵隊の連中が来たんで、事情説明して、あとは無線が飛ぶだか、怒鳴り声が飛ぶだか、えれえことになつたつてわけよ」

通報者シシニス氏の証言

「その日の朝はいつものように四時ごろに起きた。起き出して、ちつと体動かして、崖の下にもやつてあるボートのところへ降りて行こうとした。別に乗るわけじゃねえ。なんとなくもやい綱の締めまりを確かめて、櫂を手にとつてみるのが日課になつとるだけだ。その途中でヴェニゼロスが声を上げながら走つてくるのに出くわした。ちよつと見てみてくれというんで例の岩の上を見たら、確かになにかある。望遠鏡で見てみたら人らしかった。男だと思つた。あの朝は四時四十分に満潮で、時刻は四時を回つてた。岩のまわりはたつぷり海水につかつつて、かろうじて岩のてっぺんだけが鼻先つき出してるような状態だった。もう少し潮位が高けりや、

あの人は流されとつたろう。ボートでこぎ出して見張つてやろうかとも思ったが、余計なことはせんほうがいいと思つた。それで憲兵隊に電話した。なんであんなとこに人が倒れてたかは知らん。夜は九時過ぎには寝ちまうし、夜中にあのあたりでなにかあつたとしても、こつちからすりや崖の下だ。波の音やら風やらでほとんど聞こえんよ。風の強さと風向きによつちや、すぐそばでなにかされても気づかんこともある。灯台に住んで長い^が、こんなこたあはじめてだ」

デライラ・モロー夫人の証言

「この休暇は夫が考えたものです。わたしが演劇好きなもので、『タイムゲーネ』復刻上演のチケットをプレゼントしてくれたんです。誕生日のことでした。そして今年の夏の休暇はエフロギア島で過ごそうと。でもわたしときたら休暇がはじまつたとたんに体調を崩してしまつて、今週はどこへも行かずにずっと寝ていました……微熱と頭痛があつて、どうしても起き上がれないのです。医者に診てもらおうとは思いませんでした……休暇の前はかなり忙しくしていましたが、おそらく体力的に限界だつたのでしよう。こういうときは休むよりほかにしようがありません。二十八日も一日部屋にいました。朝ふたりを見送り、またベッドに潜りこんで寝ていました。ふたりとも最終の定期船で帰つてくることになっていましたから、夜の十時ごろにはホテルへ戻つてくるだろうと思つていました。十一時ごろまでは、どこかで軽く食事でも

しているのかもしれないと考えて待つていました。でも深夜になつても帰つてこないのです……わたしは不安になつてきて、何度も夫の携帯に電話しました……ジエレミーのにも……でもふたりとも電話に出ません。そのうち、どちらの電話もつながらなくなつてしまいました。

わたしは不安になり、いてもたつてもいられなくなつてきて、ホテルのフロントに電話をしました。家族が帰つてこないのだけど、こんな時間に子ども連れが遊べるような場所なんてこの島にあるのだろうかと思つてみました。たぶん、わたしの様子がおかしかったのだと思ひます、ホテルのマナージャーが部屋に来てくれ、話を聞いてくれました。そして時計を見て……午前一時に近かつたかもしれません……おかしいと思つてくれたのでしょう。従業員をやつて、港からホテルまでの道を見てこいと云つてくれたんです。

その人は、三十分ほどで戻つてきました……そして、ずいぶん注意してあちこち探したり、人に訊いたりしてみたけれども、それらしい人は見つからなかつたというのです。わたしは途方に暮れてしまいました。夫は夜遊びするタイプではないですし……そんなことは、結婚してこの方あつたためしがありません……その次には、もしかしたら息子がふざけて逃げ出して、どこかへ行つてしまつたのだろうかと思ひました。それを夫が探しているのだろうか。でもそれもあまり考えられないことでした。夫は鍛えていますから体格がいいし、力も強いので、息子はともかなわらないと思ひます。走つたつて、おそらく夫のほうが速いでしょう。夫の目を盗んでどこかへいなくなるようなことは、息子には無理です。

もう午前二時近かったと思います……わたしは不安でたまらなかつたのですが、深夜にこんなふうにな勢の人をわざわざさせて大騒ぎしているのが恥ずかしくもありました……マネージャーは憲兵隊に電話してみてもどうだろうと云ってくれました。どうせ夜明けまであと二時間ほどしかなかつたので、わたしは翌朝明るくなつてからかけてみることにして、ひとまずベッドにもぐりこみました。もしかしたら、明るくなつたら夫と息子は帰ってくるかもしれないなどと、無理にも考えようと思いました……とても眠れませんでした、少しうつらうつらしたかもしれません。

夜が明けてもやはりふたりは帰ってきませんでした。わたしは憲兵隊に電話をすることにして、午前四時を過ぎていたと思いますが、フロントに番号を確認するために電話しました。マネージャーの方が憲兵隊長とお知り合いだとのことで、直接電話をしてくれ、隊長はすぐに捜索すると約束してくれました。そしてそれから一時間もしないうちに、隊長から男性の遺体が見つかったと電話がかかってきたのです。電話が鳴つた瞬間からもう、わたしは夫になにかあつたに違いないと思いました……。

夫が殺されるような理由はなにもないと思います。あの人は優しい人で、誰かに恨まれるようなことができる人じゃありません。人間関係でトラブルがあつたというような話はあまり聞いたことはありません。昇進していくにつれて、重責に悩んでいるように見えることはありません。ただ、人間関係で悩みを抱えているように見えるには見えませんでした。よそに女性をこしらえる

には忙しすぎる人でしたし、そんな気もなかったと思います。そういうタイプではないのです。夫の仕事のことはなにも知りません……仕事の話はなにひとつできないというのは結婚する前から云われていたことです。職業柄仕方のないことと思います。夫はわたしに秘密を持っているように感じて、後ろめたい気持ちを感じていたようですが、こればかりはどうしようもないことです。

息子のことですか？ 補導歴があるのを隠すつもりはありませんが、別に悪いことをしているわけではありません。あの子は早熟なタイプで、好奇心が旺盛です。不良というのとは違います。そういうことではありません……もしも同年代の子より早熟で、社会に興味を持つのが早い子を不良と呼ぶのなら不良でしょうが、なにか悪いことをしているというわけではありません。あの子を知らない人間に説明するのは難しいのですが、あの子は自分で考え、自分で思った通りに行動します。それでいいのです。わたしの仕事はそれになるべく口をはさまず、尊重するようにすることです。あの子が夜出ていくなら、なにかあの子なりの理由があるんです。悪さをしているとか、悪い仲間とつるんでいるとかいうことではありません。深夜に歩いているからといってすぐに不良と決めつけるとか、親の監督不行き届きだと非難するような発想は短絡的だと思います。

いえ、これはわたしの考えです。息子はどちらかというわたしに似ています。ですからわたしは息子のことが理解できますし、息子が悪い人間ではないのはわかっています。わたした

ちのあいだでは、あまり話さなくても通じることがたくさんあります。ですが夫はまた別のタイプの人ですから、ときどき息子のことを理解するのに苦労しています。でも、そのことが別に夫の息子への愛情を妨げるとか、家庭生活に影響を及ぼすというような大げさなものではありません。

こう云えばわかってもらえらるでしょうか。夫はなんでも全力でやってはじめて結果が得られると信じているタイプですけど、息子は要領がよくて器用です。夫からすれば、なんとなく真面目さが足りないように映るのです。たぶん、息子は真面目に学校の宿題をやったり課題をこなしたりしたことがあります。そういうことは無駄だとあの子は思っています。あの子にとってはそうでしょう。わたしはあの子の考えが理解できる気がしますが、夫には難しいでしょう。成績は悪くないのだから別にいいと思うのですが、そういうことでは、いまはよくてもあとあと大変なのではないかと夫は心配になるらしいのです。

そういうすれ違いはちよくちよく起こります……でも夫は別にながみながみ云つたりはしません。結局、あの人は愛情深い人です。だから心配になり、ときどき息子になにか云いたくなるのですが、そして云われた息子もきちんとしたりするので、それだけです。ごく普通のことではありませんか？ 家庭生活に波風が立ったことなど一度もないとはさすがに云いません。でも、夫が殺されるほどのものがあつたとは思いません。ですから、きつと不慮の事故か、なにかとんでもない間違いが起こったかに決まっています。早く息子を見つけていただきたい

「と思います」

目下の優先すべき重要事項

- 一、定期船下船後のモロー親子の足どり。なぜ夜にあのような岩場へ行ったのか。
- 二、ジェレミー君の云う「ちよつと変なこと」とはなにか。父親に關することらしいが、事件になにか關係があるのか。ジェレミー君の居所と合わせて、彼の交友關係、学校生活などについても調査を要する。あるいは、彼が父親を殺害して逃げた可能性を真剣に考慮すべきか？
- 三、事件の動機！ モロー一家全員の仕事、学校生活、私生活全般の調査。とにかく情報を集めること！

「よくまとまった報告書だ」

セフィロスは報告書から顔を上げて云った。

「ファノラキス隊長は几帳面な人物らしいな」

クラウドは汁気のなくなつたレモンをしゃぶっていた。金髪頭のクラウドが黄色いレモンをしゃぶっているのを見ると、太陽が黄色いレモンを育て、同じようにクラウドの金髪頭を育てているのだという連想がどうしても浮かんでしまい、セフィロスは微笑んだ。クラウドがよく食べ、つやがよく健康でいるのは素晴らしいことだった。

「よくできた報告書だが、これだけではどうにもならないな。仮説ひとつ立てようがない。といつても、そもそも軍人に向かつて殺人事件を扱えなどは、人殺しに人殺しを捜せと云つてゐるようなもので、肉屋に豚に食われろと云うのとおなじくらいひどい倒錯の感があるが」

「豚だったら、おれしつぽが一番好き。村にいたとき、豚飼つてる家の屠殺場でしつぽ盗んで焼いて食べてた。いつも豚のすごい悲鳴がしてた」

豚のしつぽどろぼうは、黄色い頭を揺らして、美味なる豚のしつぽに思いを馳せる顔をした。「豚の断末魔の悲鳴は聞いたことがないが、おそろしく耳障りだろうということはわかる……さて、そろそろあの憂鬱な着替えというやつをして、出ていかななくてはならないだろう」

ふたりはしかたなく嘆きながら着替えに向かい、予審判事とやらの迎えにそなえることにした。

予審判事マルキール氏は大柄で、苦みばしつたような、ちよつといかめしい感じの顔をしており、彼には少しせま苦しく思える公用車の助手席のドアをみずから開けて出てきた。パイプ党らしく、小さな樫の木のパイプをくわえ、髪はかなり白髪が混じつて灰色になっていたが、まだ豊かだった。お腹が大きく突きだしていたが、手足は引き締まったような印象があり、いざとなればかなり力強く、また俊敏に動けそうだった。若いころはなにかスポーツをしていたに違いなく、また大変もてたに違いない。氏は上着を脱ぎ、前後で生地の違いを着てシヤ

ツのそでをまくっていた。気の利いた服が似合う男だった。

「どうも朝からすみません。こちらが憲兵隊長のファノラキス氏です」

運転席から出てきたファノラキス隊長は、小さく微笑み、セフィロスに握手を求めてきた。五十くらいの細身の、真面目で優しそうな顔をした男だった。青シャツの制服を着て、ベルトのところに拳銃を下げていたが、武器を持つ男の顔をしていないとセフィロスは思った。しようとするそぶりも見られない。ほんとうの兵士になることはできない男、上官として上に立つほうの男だ。

「このたびはご協力いただき、感謝します」

隊長はきびきびとした口調で云った。

「なにしろミッドガルの住人の事件ですので……あの大都市での生活は、ここでの生活とはなにもかも違っているはずです……」

セフィロスがクラウドを後部座席に押しこみ、自分も乗りこむと、車は出発した。ミロス氏とミロス夫人がふたりを見送った。

「現場をよくご理解いただくために、島の地理を少しご説明しなければなりません」

ファノラキス隊長は運転しながら云った。判事がダツシユボードから折りたたまれた地図を取りだし、ふたりに広げてよこした。

「この島はご覧のとおり三日月型をしており、弓なりの丸くなった部分を北西に向けて、東に

東端の岬が、南に南端の岬があります。弦の内側のほぼ中央のあたりに港があり、その港を中心として東側は商業施設や宿泊施設などが並び、非常に発展しています。一方で、その反対側、島の西側のほうは、開発がそれほど進んでいません。というのも、こちら側に例の魔炉となつた魔眺跡があるからでして、西の外側の海岸に沿つて五キロほどの封鎖区域が設けられているのです。

今回モロー中佐の遺体が見つかった岩は、南端の岬の先にありまして、この岬から海岸線沿いにしばらく岩場が続いており、この岩場を歩いていきますと、数分でタイムゲーネの岩に着くのです。岩場は満潮時には海水に浸つてしましますが、干潮になると水が引いて、岩のところまで歩いていくことができます……閣下はこの岩と同じ名を冠した例の古典劇についてご存じでしょうか。でしたらおわかりになると思いますが、この岩のあたりは西側のもとんど唯一と云つていい観光名所になっていまして、なにしろ名作の舞台とされているところですから、日中はけっこう観光客が来るのです……なんだつてこんなところで人殺しなど起きたものか、どうもわたしにはわかりかねます……」

「なにやら文学的な死体でしたな」

判事は愉快そうにパイプの端を噛みながら云つた。このマルキール判事は、どうやらパイプをただ口にくわえているだけで、煙草をつめて吸うことはしないらしい。最近では愛煙家にとつては肩身の狭い時代であるから、この判事もそうやって空のパイプをくわえることで、どうに

かして折り合いをつけているのかもしれない。なかつた。

「遺体は二十九日の午前十一時近くになつてようやく岩から降ろされた。干潮が十時四十五分だつたもんですからな。その間約六時間あまり、カモメがいたずらせんように、憲兵隊員がボートに乗つてあたりを漂い、叫んだり棒を振りまわして追い散らしたり……なんとも奇妙な事件ですよ、これは」

隊長の説明どおり、観光地として整備されている東側と違って、島の西側はいちじるしく立ちおくれ、さびれていた。港のにぎわいがおよんでいるあたりを抜けると、赤茶けた乾いた大地が延々と続き、そのところどころに民家がぼつぼつと立っていた。閉鎖区域の近くまで来ると、かろうじて地面にへばりついている植物さえほとんど姿を消して、ただ石ころだらけの荒涼たる岩地があるばかりになる。ファノラキス隊長が少し回り道をして、封鎖地区の入口を見せてくれた。フェンスと有刺鉄線が延々と続き、はるか向こうに魔眺炉が見えた。

魔眺炉のそばでは、空気に独特の重さと匂いがある。セフィロスはこの魔眺の匂いというものに昔から敏感だつたが、セフィロスのほかにそれを嗅ぎとる人間に出会つたためしがないのが不思議だつた。これもまた彼にごまんとある特異体質のひとつに違いないが、いずれにしても、魔眺炉はあまり近づきたくないしろものである。クラウドは車に酔つたのか、顔をしかめ、なんだか頭痛がすると云つた。

「このあたり一帯も、以前はもう少し植物や低木が生い茂っていました……」

フアノラキス隊長は云った。

「わたしが子どものころ、まだ神羅がこの島に進出していなかっただころのことです……以前このあたりには小さな集落がありました。漁師たちや、山羊飼いたちが暮らしていました。格別豊かではありませんでしたが、必要なものは採れました。魚、オリーブ、いちじく、ぶどう、いろいろな果物、それに少しばかりの野菜や豆……いまでは夢のようです。魔晄ができてからというもの、このあたりはひとかたまりの雑草さえ生えない土地になってしまい、海は死んでしまいました……網には、法外に大きくなった魚や変形した魚など、グロテスクな生き物ばかりかかってきました。それでわたしの両親は、この島を捨ててミディールへ移住し、わたしは島の外で仕事をつかんで帰ってきました……戻ってきてもう十年にもなりますか」

隊長が首を振り、車を出そうとしたとき、また地震が起きた。細かな横揺れがほんの数秒続いただけで止まったが、隊長は顔をしかめ、

「最近少し多いのです……ちよつと心配ですね」

「この島では地震のことをずいぶん詩的に表現するそうですね」

セフィロスが云うと、マルキール判事は微笑んで、

「なにしろ歴史的文学の舞台ですからな、ここは……タイムゲーネ三部作……例の写本が見つかる前にも、島の人間のあいだではいくら知られた話だったようですが」

「あんな偉大な作品の原典が、二千年ものあいだ人知れず洞窟の中に眠っていたとは、なんだ

か信じられないようではありませんか。摂理はときに非常に不思議なことをする……不条理と云つてもいいような」

「わたしには、この世の不条理はそのまま人間という存在の不条理さのあらわれのような気がします。文学というのはその最先端ですよ……車を出してくれますかね、フアノラキス隊長。地震はもうおさまったようだ」

やがて車は三日月の先端、南の岬にたどりついた。岬は百メートルほど海に向かって突き出すようなかつこうになっていて、その先端に白い灯台がぼつんと建っている。周囲にフェンスが張りめぐらされされていて、灯台の脇に小さな二階建ての住居がくっついていて、これが灯台守シシニス氏の暮らす家なのだろう。一同は岬の手前で車を止め、岬のちょうど右のつけ根のあたりから、こげや浜かんざしに覆われた岩のあいだを縫って岩場へ降りていった。

岩礁地帯はそこから一キロほどの長さにわたって続いているということだった。海の手を見やると、少し先に、ぼつんと海面から岩がひとつ突き出しているのが見える。

「あれがティムゲーネの岩です。いまはこうして岩場を歩いて行けますが、このあたりはもうすぐまた水の底に沈んでしまい、あの岩の表面だけが海面から出ているような状態になります……物証の保存という観点からは致命的です」

フアノラキス隊長は嘆かわしげに首をふって云い、隊長を先頭に、岩に向かって出発した。作業服を着て長靴を履いた人間が何人か、岩場のあちこちに散らばって物証探しにいそしんで

いた。二、三分ばかり岩場を歩くと、大きな離れ岩に着いた。周囲に立ち入り禁止のバリケードが巡らされ、岩の前に憲兵が二名立っている。岩は高さが二メートルほど、ちょうど台形のような形をしていて、海側のほうは上面がだいたひ平らだが、そこから末広がりになだらかな勾配を描いて、底辺は岩場にめりこんでいる。

「中佐はここに仰向けになって転がっていました……」

隊長は岩をよじ登り、岩の真ん中よりやや陸寄りのあたりに、頭を陸側へ向け手足を広げて寝転がった。

「おそらく、岩から降りようとしていたところを、背後から石で殴られたと思われます。その場合うつぶせに倒れるのが普通ですが、おそらく犯人が倒れた中佐の様子を確かめるかなにかするために、ひっくり返したのでしょう」

「凶器はそこら中に転がっていますから、突発的な犯行だとしても問題はないわけですね」

判事があたりにごろごろと転がる石ころを示した。

「おそらくこうして右側頭部を一撃……右利きの人間と思われる」

岩の上から降りてきた隊長に、判事が手近な石をつかんで後ろから殴りかかる真似をした。「そしておそらく、モロー中佐が思わずよろめいて倒れこんだところへ、もう二、三回たて続けに殴りつけている」

隊長はよろめき、膝をついた。判事が後ろからさらに頭を殴りつけるふりをする。

「狙ったかわかりませんが、犯人は最初の一撃でちょうどこのこめかみのあたり、一番骨の薄い部分に打撃を与えたようですね。中佐がいくら屈強な男でも反撃できなかったでしょうな。相当な力で打ちこんだか、だいたい重い石を選んだのか、頭蓋骨は陥没。重い石を使えば、女性でも可能だろうということですね」

判事がうつぶせに倒れた隊長の肩をつかんでひっくり返した。

「殺害したあとは、石ころをあたりに放り投げてしまえば、もうどれだかわからない……簡単なことだ。足跡も残らないし、なにか残したとしても、それから数時間すれば潮が満ちて海水が洗ってくれる……」

判事は肩をすくめ、手にしていた石を放り投げた。隊長は起き上がり、ズボンを払うと、セフィロスに向かつて、

「殺害の起きた場所と時刻ですが、よそで殺されてここへ運ばれてきたとはあまり考えられません。そんな労力を払う理由が見当たりませんし、当日の潮位からして、遺体はどこから流されてきて打ち上げられたとも考えにくい。つまり犯行はここで、この岩の上で行われたとみてまず違いないのでして、これを二十八日のモロー親子の行動とあわせて考えてみますと、夜九時三十五分に定期船を降り、車でまっすぐここまで来たと考えるのが自然です。おそらく十時十分か十五分にはここに着いていたと思います。その時刻ですと路線バスの営業も終了していますから、タクシーかレンタカーを利用したかもしれないと考えて、島内の企業や個人タク

シーの運転手などに聞きこみをしてみたのですが、モロー親子を乗せたという車はまだ見つかっておらず、レンタカーなどを借りた様子もありません。こんな大々的に報道されている事件ですから、親子を乗せた人がいればすぐに名乗り出そうなものです。利用したのはモグリのタクシーだったかもしれません……ともかく親子は十時過ぎにはこの岩場にたどり着き、なにかあったかは不明ですが、モロー中佐はおそらく十時半ごろまでに殺され、ジェレミー君は行方をくらました、ということになります。」

セフィロスがうなずくと、隊長は続けた。

「次に犯人像についてですが、単純な物取りなどではなさそうに思われます。中佐の時計や財布がなくなっているのは事実ですが、強盗の犯行だとすれば、遺体を岩の上に放置などしないので岩場へ引きずり下ろせば、やがて潮が満ちてきて遺体は海水に浸かります。おそらく遺体はすぐそこ海岸へ打ち上げられるでしょうが、それでも事故か事件か、中佐がどこで死んだかといった問題はいまよりよほど判別が難しくなつたろうと思うのです。強盗を思いつくような人物ならそれくらい知恵は回つたでしょう。犯罪組織などの報復や見せしめのための処刑なら、もつとほかにやりようがあつたでしょうし、いざれにしてもちよつと頭の回る人間なら、この岩の上に遺体を放置するなど、ここで殺人があつたから見つけてくれと云っているようなものだというくらいわかるはず。犯人は突発的に中佐を殺してしまつたはいいが、おそれをなして後先を考えずに逃げ出したか、あるいは逆によほど大胆不敵なやつか……いざれ

にしろ、犯行を隠蔽しようなどとはこれっぽっちも考えなかつたらしいのは確かです」

隊長は顔をしかめ、首を振った。

セフィロスは岩の上を見、次いで視線を海のほうへ向けた。それからクラウドになにか気になることはあるか訊いてみた。

「特にないけど、おれ息子が親父を殺して逃げたに一票入れとく。それが一番簡単だもん。あと、あれなんでなんとかの岩っていろいろの？」

クラウドは離れ岩を指さした。

「ここはある文学作品の舞台になったと云われているところだね……」

判事は待ってましたとばかりに云って、ちよつとにやついた。

「この岩と、それからこの先に、ちよつと魅力的な洞窟があるんだがね、そこもタイムゲーネの洞窟と呼ばれとる。行ってみるかね？」

クラウドがうなずくと、判事は先へ向かって歩き出した。

その洞窟は、岩場をさらに十五分ほど歩いた先にあつた。岩場はそこでせり出した崖に阻まれて行き止まりになっていたが、その崖に人ひとりを通れるほどの縦長の穴が空いていて、中に奥行き五十メートルほどの小さな洞窟が広がっているのだった。

「昔この洞窟の中で、ある女性が男の子を産んだと云われている。そしてそのあと、さつき見たあの岩の上から海に身を投げたとね……どれ、ひとつ昔話をしましょうかな……」

セフィロスとクラウドが興味深げに洞窟の中を見回していると、外から中をのぞき込んでいた判事が云った。

「昔々、まだ古代種と呼ばれる人たちがこの地上に暮らしていたころ」

判事ははじめたが、その声は狭い洞窟の中にこだまし、朗々と響き渡った。

「彼らはいつも旅をしていた。この星をあちらからこちらへ、またこちらからこちらへと。あるとき、ひとりの美しい少女がこの島へやってきた。竜の背に乗り、島々をあちらこちらとさまよった末。そのころこの星には、いまは見ることもかなわぬ多くの不思議な生き物があり、またすべての生き物は、仲むつまじく暮らしていた。ティムゲーネというこの美しい少女は、浜辺にたどりつき竜の背中から降りると、あたりをぐるりと見回った。そのころこの島は、乾燥し、荒れ果てた、岩肌がむき出しの場所だった。そこでティムゲーネは歌を歌い、植物の種をまいた。ぶどう、いちじく、オリーブ、マルメロ、小麦に大麦、からす麦、山羊や羊の食べる草まで。彼女は一頭の牝山羊を連れていた。美しい黄金の毛並みの山羊を。山羊は島の牝山羊と交わって子どもを産み、ティムゲーネも島へ住みついた。そしてあつという間に島をたくさんのおいし物の実る、豊かで美しい土地にした。

さてこのティムゲーネが、島を満ち足りた楽園のようにして、豊かに過ごしていたある日、人間たちが島へわたってきた。彼女は人間たちに親切にし、植物の栽培方法を教え、山羊の管理を教え、人間が島で平和にともに暮らせるようにした。ティムゲーネは優しい乙女で、他人

を疑うことも、武器をとることも知らなかった。

ある日、それは古代種たちが星に感謝を捧げる祭りの日で、ティムゲーネが火を焚き、捧げものの準備をしていたところ、彼女のもとに、エルシートという青年がやってきた。美しく精神なエルシートは、ティムゲーネの恋人だった。ふたりはよく一緒に歌い、一緒に山羊の世話をした。草原に遊び、岩陰に寝て、ふたり楽しい時を過ごした。彼は云う、家の山羊が産気づいたが、とても苦しそうだ、どうか診てやってほしい、と。美しい恋人の頼みに、ティムゲーネは出かけていった。恋人がいつになく強引に自分を引いても、ティムゲーネは不思議に思わなかった。美しいエルシートは、山羊を想って気が急いでいるのだと、ティムゲーネは思った。

だがティムゲーネが恋人の家まで来たところ、山羊などどこにもいなかった。そのかわり、たくさんの男たちが飛び出してきて、ティムゲーネをとらえ、殺してしまおうとした。悲鳴を上げて逃げまどうティムゲーネを、恋人はぞっとするほど冷たい目で見、笑っていた。

ティムゲーネは必死に逃げ、どうにか人間どもをふりはらい、怯える足で、どこへ行くべきかもわからぬままに、ただただ逃げた。人間たちは追いかけてきた。ティムゲーネは逃げまどいながら星に祈った。

『おお、星よ、わたしたちの慈悲深き母よ、わたしはこれまで、わが命のさだめに従い、この地上をさまよい、出会う土地のすべてをあなたの豊かさで満たすように尽くしてまいりました。もしもわたしのこれまでの働きが、少しでもあなたのお気に召しましたならば、どうかわたし

をお助けください！　ですがもしも、人間と恋に落ちたこのわたしが、あなたの定めた掟を破つたというなら……それならば致し方ありませんまい、わたしはあなたからの罰を受けるにふさわしいのでしょうか。どうか答えをお示してください……』

ティムゲーネは祈りながら、いつしか島のはずれにたどりついた。このときちょうど海の水が引き、いつもは見えない岩場があらわれた。ティムゲーネはわらにもすがる思いで、岸壁をつたって岩場を進む。するとまるでティムゲーネのために用意されていたかのように、小さな洞窟が口を開けているのが見えた。彼女が洞窟へもぐりこむと、海の水が満ちて、岩場の道はふたたび水の中へ消えてしまった。

ティムゲーネは洞窟の中で星に感謝の祈りを捧げ、疲れ果てて眠った。夢の中で、彼女は星のお告げを受けた。自分がエルシートの子を身ごもっていること、その子を無事に産み落とすまで、母なる星は自分を見捨てはしないことを彼女は知った。やがて月が満ち日が満ちて、彼女は洞窟の中で男の子を産んだ。いまや星は彼女にこう告げた。

『その子を海に流しなさい。慈悲深い人に拾われて生き延びるでしょう。その子は将来、そなたのために必ずや復讐を果たすでしょう。そなたはいま役目を終え、わたしのもとへ還るのです』

そこでティムゲーネは、洞窟に流れついた板きれに赤子を乗せ、洞窟を出て海に流した。ふと沖のほうを見ると、少し先にぼつんとひとつの岩が海面からつき出ている。ティムゲーネは

そこへ向かつて行き、岩の上に登って両手を広げ、母なる星に最後の祈りをささげた。

『おお、わたしたちの母よ、あなたの慈しみに感謝します。わたしを裏切った人間たちに、どうかあまり手ひどい仕打ちをしてくださいな！』

タイムゲーネが祈りを終えると、どこからあの竜があらわれた。彼女を乗せてこの島へ運んだ竜、彼女の古い友だちの竜が。タイムゲーネは竜に向かつて微笑み、岩の上から海に向かつて身を投げた。しばらくのち、彼女の遺体は海の上に浮かんだが、竜は彼女をふたたびその背に乗せ、はるか南を指して、彼女を運んでいった。のちに息子のシカムケインが、島の人間に復讐を果たすのだが、それはまた別の物語。ともかくも、タイムゲーネはこの洞窟にかくまわれ、息子シカムケインを産んだと云われております。それでこの洞窟をば、古くからタイムゲーネの洞窟と呼び習わし、この先の離れ岩をば、タイムゲーネの岩と名づけているのです」

判事は美しい韻律を駆使して、滔々と語った。その声の深く感動的な響きといったら、セフィロスは感激して、しばらくものも云えないほどだった。

「タイムゲーネ三部作の第一部だ。人間に裏切られた、汚れを知らぬ古代種の悲劇……第二部では息子のシカムケインが島の人間相手に壮絶な復讐劇をくり広げ、第三部では彼はユートピアの国を築くが、結局は人間の反乱によって殺される……判事はどこかで演劇か朗読を？」

セフィロスはまだ感激した声のまま云った。

「なに、昔ちよつと演劇をかじりましてな……」

判事はいろんなものをたつぷり含んだ笑いを浮かべた。

「といつてもわたしは端役もいいところ、わたしの興味の大半は、劇場に出入りするさまざま
な女優たちだった……」

判事が垢抜けているわけである。

「しかしあなたはよほど文学か演劇かその両方がお好きと見えますな」

判事は感激に浸っているセフィロスを半ばあきれたように見つめながら云った。

「両方を」

セフィロスは胸に手を当てて、ちょっと肩をすくめた。

「生まれ変わったら、インクか場末の劇場の雑役夫あたりになりたいものだと思います」

判事は笑いだし、隊長はどう反応したらいいかわからないという顔をした。クラウドはとつ
くに話に飽きて、洞窟を出て岩壁をよじ登ろうとしたりしていた。

岬に戻ると、灯台の脇でひとりの男がなにか仕事をしているのが目に入った。どうやら壁に
ペンキを塗っているらしい。

「事件の通報者、灯台守のシシニス氏です」

隊長はそう云って、こちらに気づいて顔を上げたシシニス氏に向かって帽子をとってみせた。

「この灯台は十年近く前に自動化されたのですが、シシニス氏はまだ灯台守としてここに住ん

でいます……：灯台の自動化が決まったとき、住民はシシニス氏の仕事を奪わないでほしいと署名活動まで行い、行政に直訴しました。彼は先の戦争で片足をなくしたのです。この島ではほとんど英雄扱いで、確かにそれに見合う立派な男です……」

近づくにつれ、シシニス氏の左足が義足であるのが見てとれた。濃い黒ひげと眉をそなえたシシニス氏は、気難しそうで、小柄だが頑丈そうな体つきの男だった。彼は手にしていた刷毛を白いペンキの入ったバケツにつっこむと、腰にぶら下げていた布で手を拭き、フェンスの外へ出てきて、一同に敬意を示して、かぶっていた緑色の帽子をとった。

「ペンキ塗りですか……：やっかいで楽しい仕事ですな」

判事がシシニス氏と握手しながら云った。シシニス氏はどこぞの馬鹿者が壁に落書きをして行きおったというようなことを口の中でもごもご云った。

「先日は一報を頂戴し感謝します」

ファノラキス隊長は手を差し出しながらシシニス氏に向かって微笑んだ。シシニス氏は首を振り、誰でもそうするというようなことを口の中でもごもご云った。隊長がセフィロスとクラウドを紹介し、いま一緒に現場を見てきたところだというと、シシニス氏は例の少年はまだ見つからないのかと訊ねた。

「まだです。懸命に探してはいるのですが……：ところで、あなたは事件のあった晩、なにか変わった出来事を見たり聞いたりしなかったか、思い出せませんか。しつこくお伺いして申し訳

ないのですが、最初は思い出せなくても、何日か経ってからそういえばと思うようなことは、よくあるものですから」

憲兵隊長といういわば権力の側にある者が、このように敬意を払う男というのはいったい何者だろう。セフィロスは興味深くシニス氏を見つめた。シニス氏の左足は、太もものつけ根から下がらないようだった。おそらく爆弾か地雷かで吹き飛ばされたのだろう。壮絶な戦いを生き抜き、生還した元兵士。彼もミロス氏と同じように、一般人の志願兵ではないだろうか？意志の固そうな目つき、容易に開きそうにない一文字に結ばれた口もと、寡黙で頑固な男、シニス氏はそのような人物であるように見受けられた。

「いや、なにもねえ」

シニス氏はしばらく考えこんだのち、首を振った。

「あの夜はなにも見なかった」

「そうですね。おそらくそうに違いありませんが、もし万が一なにかあれば連絡をいただけるかと助かります」

「あなたはわれわれと違った高い視点を持っておられる」

判事が目の上に手をかざしてひさし代わりにしながら、灯台を見上げて云った。

「そこからの眺めは、われわれ地上からものを見る人間の見え方とはまったく異なることでしょうか……」

みんななんとはなしに灯台の上のほうを見上げた。てっぺんの灯室では、夜になれば巨大な目のようなフレネルレンズが、遠隔操作によつて時間ごとに向きや角度を変えながらゆつくり回転する。はるかな高みから世界を見下ろす目。神の目のごときその動きと輝き。

シシニス氏は視線を地上へ戻すと、なんとなく一同を眺め、クラウドにちよつとのあいだ目をとめた。が、すぐになにごともなかつたように視線をそらし、軽く一礼してから帽子をかぶると、フエンスをくぐり、また刷毛をにぎつてペンキ塗りの作業に戻つた。

車に戻ると、隊長はマルキール判事行きつけのレストランめがけて出発した。港のはずれにあり、小さいが開放的で明るい店で、それぞれのテーブルの上には花を飾つた小さなグラスが置いてあつた。きつい巻毛をポニーテールにした、アーモンド型の印象的な目をした女が注文を聞いて回つていた。判事は彼女に気さくに声をかけ、カテリーナと名前で呼んでいた。

「捜査は非常に難航しています」

注文が済むと、フアラキス隊長はけわしい顔つきで云つた。

「ひとつには、モロー中佐がどのような事件に巻きこまれたのかまるで手がかりがない。ゆえにジェレミー君をどこでどうやって探したらいいのかも雲をつかむようだということです。なんといつでも中佐はミッドガルの人間で、休暇でここに来ていただけなのですからね！ 事件の鍵は、おそらく一家のミッドガルでの人間関係にあるに違いないのです……ですから隊の中でも、この件は陸軍捜査局に任せるべきだと思つている者が大半だと思ひます。わたしも

そう思いましたが、われわれの担当になってしまった。まるで解決しなくてもいいと云われているようではありませんか……それでわたしはやくに障って、なんとかこの事件を解決してみたいと思うのです。そうでなければモロー夫人が気の毒ですからね」

隊長は良心的な人物のようだった。モロー夫人のことを語るとき、フアナキス隊長はどことなく、家庭的な男が責任を感じているときの顔つきになった。

「その決定には大きな意味があるように思いますな」

判事は平べったい、大きな手をしていた。彼がナイフやフォークを握ると、道具が小さく見えたと。

「通常、そのような決定がなされるとき……つまり、軍人が明らかに不自然な状況で死んだのに、軍の捜査局があまり介入しないという決定をするとき……そんな決定がなされたことがあればの話だが……それはどういう意味を持つのでしょうか。あなたのことは、プレジデントから直接捜査に加えるよう推薦されたのですが、これはいったいどういうことなのでしょう」

判事は鋭い目でじろりとセフィロスを見、いきなり直球勝負に出た。判事はきつと、急所をぐさりとやりたいときには誰にでもこの刃のような視線を向けるのだろう。

「通常、そのような決定がなされることはまずないのですが」

セフィロスはしかし、なんとなくこの判事をからかってやりたいような気持ちになるのを止められなかった。腹の突き出た、しかめっ面のこわい目つきの男なのだが、なぜかセフィロス

はその中に、ほくそ笑んでいるいたずら好きな少年を感じていた。

「思い出せるかぎり、そんなことはこれまでであったためしがない。軍の秘密主義と閉鎖的仲間意識はおそろべきもので、となりの部隊のことさえなにもわからないほどです。身内の死の調査を他人に任せることなどありえない。ところが今回に限っては、これはほとんどわたしの身から出た錆というやつで」

セフィロスは北方の小国家の情勢や出社拒否の話などをかいつまんで説明した。大人たちの話をよそに、クラウドは食べることに専念していた。彼は料理が出るたびに鼻をくんくん動かした。ファノラキス隊長はそれをときどき眺めて、気づかれないほどそつと小さな笑みを漏らしていた。同じくらしいの歳の子どもがいるのかもしれないなかった。

「ですからこれはある意味で自業自得というか、わたしが自分で招いた事態というわけです。率直に云って、殺人事件の捜査など管轄違いもいいところで、陸軍のことはまるでわからないし、死亡したモローという男のこともなにも知りません。おまけにわれわれは休暇の最中だった。文句を云ってやりたいくらいのものだが、お話ししたとおり局長のわたしに対する怒りはもつともだし、プレジデント直々のご指名とあつては逆らうわけにもいかない。なにを期待されているのか知らないが、探れというなら探ってみようというところですよ」

判事はこの回答をじっくり考えているようだった。ファノラキス隊長もまた考えこんでいた。やがてふたりはちらりと視線を交わし、互いの口元に小さな笑みを浮かべた。

「ようこそ、エフロギア島の捜査部隊へ」

判事はおどけて云い、セフィロスに手を差しだしてきた。ふたりの握手を、クラウドはテーブルに肘をつけて見ていた。サラダについてきたオリーブを、口の中で転がしながら。

「きみもわれわれの仲間に入るかね、ええ？」

判事はちよつと笑ってクラウドを見た。ファノラキス隊長もまたクラウドを見ていた。クラウドはちよつとのあいだ判事と隊長を交互に見た。それからオリーブを飲みこみ、手をズボンでこすつて（ナプキンがあつても、反射神経が慣れ親しんだものを求めてしまうのだ）、判事と握手した。それから隊長と握手した。

判事はカテリーナにワインを頼んだ。クラウドは飲めないで、アルコールを抜いたワインが出された。彼らは乾杯した。クラウドは薄いあめ色の液体が入ったグラスをくんくん嗅いだ。それからひと口飲み、ちよつと複雑な顔をして、グラスをテーブルに戻した。

「プレジデントとは、三十年ほど前に知り合つたのでしたかな……」

判事が目を細めて云つた。ワイングラスを手にして、くつろいだ様子だつた。

「ある事件の裁判で出会つたのです。わたしは駆けだし判事で、神羅の関連企業が訴訟を起こされたんだつた……判例を作ることになる非常に重要な裁判でしてな、プレジデントは神経をとがらせていた。魔晄炉の稼働がはじまり、その絶大な恩恵とともに影響もなにかと表沙汰になりはじめたころです。彼にはすでにヴィジョンがあつた。若く、熱意を持つた革命家だつ

た……彼は本気で世界を変えようとしていた。たぶん世界はその熱に打たれたのですよ。裁判は神羅に有利に進み、それがくつがえされることはなかった。裁判の過程でわたしはプレジデントと親しくなりました。歳が近かつたし、彼のヴィジョンが理解できたのです。先の戦争を肌で知っている人間なら、彼の云いたいこと、やりたいことがわかるはずだ……プレジデントは、二度とエネルギー問題をめぐって戦争が起こることのない世界を創ろうとしている。資源や食料のために人々が争いを起こすことのない世界を目指している。彼のやり方には、もちろん賛否両論ありますが、少なくともわたしは、その熱意や意義は理解できるのです。裁判が終わってもわれわれの交流は続いた……この島に来たのは一九八八年です。最後までくすぶっていた訴訟をいくつか担当しました。ほんとうは何年かしたら故郷へ戻るつもりだったが、なぜかこの島が気に入ってしまい、ずるずるこうして判事をしているわけです。なにしろ暇ですからな、ここは……わたしはそのときに、実質引退したようなものですよ……」

「デライラ・モローの父親も、神羅に訴訟を起こしたのでしたね」
セフィロスは云った。

「そのようですな。最初から負けがわかつている裁判だ」

判事は真剣な、職業人の顔つきになった。

「当時の資料をとり寄せられるかどうか、いまやっているところです。とはいえ、読んだところでおそらく無数にある決まりきった訴訟のひとつにすぎんでしょう……こういうことです

……いいですか、神羅の進出と魔晄の建設によつて生活の糧が奪われたと主張する被告に対しては、いつも結論はこうです。それは必要悪であり、不運ではあるが尊い犠牲である、と。この世界は根本的にそのあり方を変えようとしている。土地がすべての富の源泉であった世界は終わってしまったのだ。だからきみたちも土地にしがみつくことをやめ、どうか自由に生きてくれたまえ……そして神羅は補償金を出す。それを元手に家を買うなり、商売をはじめたり、好きにしろということですよ」

「そしてそれがスラムを拡大し、悲喜こもごもを生み、反神羅組織をはぐくみ、神羅の武装化を加速させる」

セフィロスは微笑んだ。

「なにがおっしゃりたいのですか？」

ファノラキス隊長がセフィロスの表情をうかがいながら訊ねた。

「なにも。報告書を読んでいて、こう思っただけです……いつたいどこに男ひとり死に至らしめるものがあるのだろうか、と。それも鍛えられた陸軍中佐を。中佐の任務が関係しているということはありません。砲兵隊に死をもちたらない。砲兵隊ですよ。モロー中佐は立派な将校だったかもしれないが、砲兵隊は将校に死をもちたらずような性質の任務には通常就かない。ではモロー夫人はどうか？ 彼女の父親はたとえ一瞬にしろ、神羅カンパニーとことを構えたことがある。デライラ・モローは故郷が消滅した経験をもっている。大陸奥地の片田舎から出てきた娘が、どうやっ

てミッドガルで生き抜いて、陸軍中佐の妻になったのだらう。そのことが少し気になったといえはなりません……彼女の調書をとったのは誰です？ 睽目すべき女性だとは思いませんか、この供述内容からして……」

「わたしが話を聞きました」

フアナラキス隊長がそのときのことを思い出すような目つきをして云った。

「中佐の捜索依頼の電話はわたしが直接受けたのですし、そのほうがいいと思つたのです。非常に賢い女性……非常に賢い女性だと思ひました。わたしはなんとはなしに気おくれがしたほどこです……でも彼女はそれをひけらかすようなそぶりはまるで見せないのです。女性的で優雅な雰囲気の中にするどい知性と静かな自信を隠しているといった感じで……」

隊長はため息をついた。

「正直に云つて、わたしは彼女を尊敬することはできませんが、あまり長いこと相手をしたくないですね……」

隊長は苦笑を浮かべた。

「それに、モロー夫人については確かに不明な点が多いのです。夫人が十七歳で生まれ故郷の村を出、建設がはじまつたばかりのミッドガルへと移住したことはわかつているのですが、その後モロー中佐と結婚するまでの約十年間、彼女の記録は一切ないのです。その間どこでどうやって生きていたのか、いまのところまつたく不明なのです……」

隊長は首を振った。

「謎の女ですな」

判事がにやりと笑ってつぶやいた。

「だがこの手のことは別に珍しくない……ミッドガルというのはそういう都市でしょう。あの都市の建設がはじまった当初は、世界中からミッドガルめがけて労働者や一旗上げんとの野心に燃えた人間が押し寄せたが、その後どうなつたかなど誰も知らない。いまはどうか知らんが、当時は行政もまともに機能していなかつたし、人口調査などきちんで行われているわけがありませんから……あの都市を相手にするというのは、どっちみち容易なことじゃない。エフロギア島にしようとミッドガルにしようと、あのとらえどころのない都市を相手にするというのは……」

判事は肩をすくめ、微笑んだ。

「われわれの今後についてなのですが」

食事を終えて車に乗りこむと、セフィロスが云った。

「もし特にやってほしいことがないというなら、さいわいなことに、こちらはミッドガルにうじゃうじゃ部下を抱えているし、その中には調査というものに実に最適な男がいる。その男に、ミッドガルにおけるモロー一家とでもいふべきものを調べさせたいのですが」

「そうしていただければ助かります」

ハンドルを握った隊長がうなずいた。

「われわれは、あと二、三日はジュレミー君の捜索で手いっぱいになってしまおうと思うのです。それが最優先事項ですし、この事件が報道されてからこつち、ミディールや近隣の諸島も含めて、ジュレミー君に似た少年を見かけたという通報が後を絶たないのです……いつもこうなのです。そのうちの九割九分九厘までがいたずらか無関係であることはわかりきっているのですが、それでも確かめないわけにはいかないのです。ミッドガルにおけるモロー一家のことは、喜んでそちらにお任せしますよ」

「一日の終わりに、ファノラキス隊長のオフィスでめいめいその日の収穫を報告しあうというのはどうでしょう」

判事が小さく手を挙げて提案する。

「わたしには役職上、一応捜査を主導する責任がありまして、報告を受ける必要がありますから……」

「といつても、マルキール判事が捜査に口を出すようなことはめつたにないのですがね。判事のオフィスはわれわれと同じ敷地内にあるのですが、判事ときたらいつもわたしのオフィスにいらつしやることのほうを好んで、こちらからはほとんど行く必要がないほどですよ。普通は逆なのですがね」

隊長が微笑んだ。

「では毎日午後六時にわたしのオフィスに集合ということでしょうか？　もちろん、そのあいだになにか重大な発見があれば、互いに報告することにして」

判事はうなずき、クラウドはあくびし、セフィロスはそれはいへんよいと云った。

5 本社ビルのフェア氏

七月三十日 月曜日

「キジル？ キジニ？ ごめんなんつった？」

というのが、調査に最適な男フェア氏が電話を受けたときに発した第一声だった。

「キニジ。わが副官殿はいまどこにいるんだ。ずいぶん騒がしいが」

「六番街の店。いまさあ、おれたちある男のこと慰めてやってんの。おれと飲み友人かです。そいつの部隊の隊長ね、死んじゃったんだって。部隊じゅうがお通夜って感じらしいんだけど、そいつ、隊長にすごくかわいがってもらってたらしくてさ」

ザックス・フェア氏は店の外に出た。あたりには似たようなバーや飲み屋が軒を連ね、細い路地にオレンジの明かりを投げている。週のはじめだからか、ミッドガルの繁華街と呼ばれ

る六番街の大通りも、人通りはそれほど多くない。

「とても香ばしい予感がするのだが、その隊長の名前はモローというのだろうか」

「ピンポン！ いやあ、偶然なのよこれが。おれの知りあいの知りあいの友だちの彼女の知りあいだったの。ん？　なんかぬかした？　まあいいや。んで？　キニジ？　キニジってなに？」

「その死んだモロー中佐の奥方の出身地。実は副官殿に折り入ってお願い申し上げることがあるのだが……」

セフィロスの説明を、ザックスはいつも命令を受けるときにそうするように、一度で隅から隅まで頭に叩きこんだ。

「ふんふん、要するにあれね、ボクそのモローさんちの父ちゃんと母ちゃんと息子のこと、なるだけ調べてあなたに報告すればいいわけね。んであなたの勘では奥さんは訳ありっぽい。わーお、おれ訳ありの奥さんって大好きなの。言葉の響きだけで体じゅうしびれちゃう。オツケー。ちよつと調べてみる。暇だし。慰め会が終わったらね。かわいそうなやつなんだよ、そいつ、親父さんが小さいころ死んじやってさあ、中佐のこと親父さんみたいに思ってたっぽい。まだ十八だつて……その調べもの話、超特急？　それともなるはや？　ところで休暇楽しんでる？」

電話の向こうから、たいへん楽しんでいるという答えと、クラウドは非常に元気であり、天

気は毎日とてもよいという追加情報が返ってきた。

「あーあ、おれも休みほしい。ビーチで転がったりバーベキューしたりしたら楽しいだろうな！ あ、そうだ、おれ契約書のコピーもらったんだ。はじめてまともに見た。そしたらさ、おれ有給いっぱいあんのね。知らなかった。こんだけあつたら実家帰れんじやん、つて云つたらさ、となりにいた女の子にすごい顔で見られた。ボス知ってた？ 有給って消えるんだって。おれは知らなかった。いま知つてよかった。四十になつてから知つたんじや、失われたものがかすぎんじやん。そんで悔しいから、おれ今年是有給全部使つてやるつて決めたの。だからね、おれあんたが帰つてきたらしょっちゅういなくなるよ、よろしく」

彼のボスは電話の向こうで、大変よろこばしいことを聞いたと云い、有給が消滅する件は知つていたが思い出せてよかつたと云い、しょっちゅういなくなるのは問題ない、人生は短いだから、仕事だけに専念しているわけにもいくまいと云つた。

「まあとにかく、クラ坊によろしくつていうか、あいつ毎日なにやつてんの？ 暇で文句云つてる？ だろうね、あいつおれと一緒にで貧乏性だから。大丈夫大丈夫、ほつといてもそのうちなんか仕事見つけるから。根っからの肉体労働者なのよあいつ。おれと一緒に。貧乏暇なし、母ちゃんのためならエンヤコラですよ」

電話が終わり、ザックスは店に戻つたが、モローの部下はほとんど酔いつぶれていて、ザックスの知り合いが介抱していた。

知り合いがあとはなんとかするといふので、フェア氏は本社へ戻ってみることにした。早い時間に飲みはじめたので、時刻はまだ午後七半を回ったばかり。夜に元気になる男ザックス・フェアとしては、午後がはじまったばかりのような気分だ。本社に戻ると、受付に愛すべきミシェル・ブーラン嬢がまだ残っていた。容色一本で釣りあげられることの多い受付嬢だが、ブーラン嬢は容色のみならず、実に細やかな気配りのきく精神と、無敵の微笑を持ちあわせている。赤みがかつたブロンドの細面からは想像できないが、どんな横暴な客や理不尽な要求をまき散らす客も、笑みのひとつでおさえこんでしまう。

「あれ？ ブーラン様今日残業？ 受付六時まででしょ？」

ブーラン嬢はカウンターの奥で端末を操作していたが、顔を上げた。

「今日はプレジデントの大事なお客様がいらしてるんです。誰かひとりお帰りになるまで残っていてくれと云われているので」

ブーラン嬢は微笑んだ。朝早くから働いているはずなのに、化粧崩れなど少しもなく、まるでいま出勤してきたばかりといったふうだった。自分の仕事の意味や価値を心得ているブーラン嬢は、疲れて見えたり沈んだように見えたりすることが決してなかった。

「で、まだお帰りじゃないってやつ？ まじかあ、お疲れ。おれもこれからもうひと仕事よ。でもブーラン様に微笑んでもらったから、もうひとふんばり頑張れそう。んじや、ちよつと行ってくるわね」

ブルーラン様は微笑んでくれた上、頑張ってくださいねとまで云ってくれた。

ザックス・フェア氏はエレベーターに乗りこみ、六十二階へ直行した。愉快なドミノ市長のいる六十二階には、総務部の「資料係」と呼ばれるおそるべき社員たちがその力を遺憾なく發揮して作成した、膨大な資料が整然と並ぶ資料室がある。総務部の仕事はあらゆる企業におけるのと同じくこの神羅カンパニーにおいても多種多様であるが、「資料係」は世界中から整理整頓にとり憑かれた人間を集めたとうわさされ、その徹底周到完全異様な業務遂行ぶりではかの社員たちから大いにおそれられている。

エレベーターを降りると、空調の効いた建物独特のにおいがザックスを迎えた。この階には例の愉快なドミノ市長のほか、総務部が一区画を占めているが、総務部の部屋にはまだ何人かの社員が残って仕事をしていた。部屋の入り口近くで、ひとりの若い女性社員がスーツを着た男に絡まれているのが目に入った。

「ありやりや」

とザックスは云い、つかつか歩いて行って、遠慮なしに総務部のドアを開け、陽気に声をはり上げた。

「ユ、リ、ちゃん！　こんな時間にごめんね！　ちょっと訊きたいことがあんだけど」

ザックスの声を聞きつけて、ユリちゃんと呼ばれた女性社員はほっとした顔で振り向き、彼女に絡んでいた男性社員は……三十かそこらの、派手な縮れ毛をした男だった……いまいまし

そうに首をひねってザックスを見たが、相手が相手とわかるや、急に顔つきを変え、女性社員に向かつてなにかもごもご云い、そそくさとその場をあとにした。

「あー、ザックスさん来てくれてよかった！ 助かりました」

ユリちゃんは胸に手を当てて、心底ほっとしたようにため息をついた。ユリちゃんは、ウータイ系の二十四歳になる女の子で、ザックスは共通の知り合いを介して何度か一緒に飲んだことがあるのだが、気さくでよく気のつく、頼りになる子という感じだった。ウータイ系ということもあり、神羅に入社するにあたっては家族や親族ともめたりもしたようだが、自分の考えを貫く芯の強さもある。

「ユリちゃん、だいじょぶ？ なんかもつちや絡まれてなかった？」

ザックスは氣遣うように云った。

「ええ、まあ……でもあの人、誰にでもああなんです。経理部の人なんですけど、実家がお金持ちとかで、コスタに別荘を持つてるっていうのが自慢なんです。それで、いつもそこに女の子連れて行きたがってるみたいで、けっこう誰彼かまわず声かけてるみたい。あたしもちよつと前から何度か誘われてて。毎回ちゃんと断ってるのに。しつこいけど、別につきまとわれないとかじゃないから、大丈夫です」

ユリちゃんはこつと笑ってみせた。彼女はたとえ社交辞令を交わしているだけのときでも、言葉の最後にこの笑顔をくり出すくせがあつて、それが男をつけあがらせるのではないかと

ザックスは思うのである。そういう意味では隙だらけの子だが、根が真面目でけっこう頑固なところがあるために、これまでたいした事故もなく済んでいるらしい。

「そうお？　ならいいけど、迷惑してんだつたら云ってね。おれ一発ぶん殴って黙らせるからさ」

「ありがとうございます(例の笑顔)。ところで、訊きたいことってなんですか？」

「あ、そうそう、あのね、ちよつと昔の資料探してんだけどさ、受勲祝賀会の会計報告書っていう、超ニツチな資料なんだけど、そんなんとつてあるかどうかってわかる？」

ユリちゃんはにこつと笑った。

「すぐ調べられますよ。うちの資料係、すごいから。どの棚に何年のどういう関係の資料がおさまってるか、全部データベース化してくれてるの」

ユリちゃんは自分のデスクにきびきび歩いてゆき、端末に向かってしばらくなにか打ちこんでいた。

「あつた！　ありました、受勲祝賀会の会計報告書。陸海空軍別にわかれてて、資料室三のE八から二十一の棚にあるそうです。どの軍のいつのものを探してるかわかれば、もつと絞りこめそうですけど」

「んーつとね、一九八七年から引くところの……いいところ二、三年くらいだろうから……一九八四年から八六年くらいかな、陸軍の」

「けっこう昔の資料ですな……ちよつと待つてくださいね……それだったらE十一の棚にあるみたいです。年別月別で並んでいるみたいなので、その棚片つ端から調べていけば、たぶん見つけられると思います」

「E十一ね。オツケー、ありがとユリちゃん。助かったよ。今度またみんなで飲みに行かない？」
「行きたい！ でも八月までは無理かな。自分の夏休みに入るまで、毎日こんな調子だもの。残業残業で。まあ夏休みが控えてるつて思うから頑張れるんだけど……ザックスさんも今日は残業なんですか？」

「そうなのよ。つていうか一回家帰ったんだけど、野暮用ができちゃつてさあ。雇われ人つてつらいわよね。ありがとね、ユリちゃん、飲み是件、ひまになつたら教えてよ！」

ザックスはユリちゃんに手を振つて、資料室三へ入つていった。

総務部資料系の血眼と異常な整理欲求と整頓癖の結晶とも云える資料室は、天上まで届く棚が列をなして並んでいるせいで、いつ来ても薄暗く、あまりにもととのつて整然としている。資料室の入り口に、おあつらえ向きにデスクがひとつ置いてあつて、端末が一台とメモ用紙が置かれている。なにかと理由をつけてこの資料室ばかり日を過ごしている社員が何人かいることをザックスは知っているが、もしも神羅の平社員だったらセフィロスあたりもそういう人種になりそうだ。ファイリングされた資料の山は、すなわち歴史の山でもある。過去への興味によつてのみかろうじて現在を生きることのできるような人種が、案外多くいるものだ。彼ら

は、ザックスにはただの紙の山としか映らないこうした光景の中から、なにをくみ出し、なにを持ち帰ってくるのだろう。このいびつな、よどんだ、人工の光だらけのミッドガルに。

E十一の棚はすぐに見つかり、目的の年代の資料もすぐに見つかった。ザックスはさつそく八四年から八六年のファイルを引き出して、入り口の横にあるデスクに運んだ。

モロー中佐の部下が泣きながら話してくれたところによると、中佐とその夫人との出会いは、陸軍の叙勲祝賀会でのことだった。イベントコンパニオンとしてパーティーに参加していたデライラ・サボーに、ジョーゼフ・モローはひと目ぼれしてしまったのだ。

「中佐の奥さんがとても美人だつてことは、隊の全員が、というか陸軍全員が知つてました……有名だつたんです……ぼくが聞いた話だと、中佐は夫人をはじめで見たとき息が止まつてしまつて、しばらくそこから動けなかつたそうです……中佐つて、誰かが下ネタをしゃべろうもんなら顔を赤くしたり怒つたりするような人で、童貞だとかねんねだとかしょっちゅうみんなにからかわれていたらしいんです。それが、夫人を見たときにはもう目の色を変えてしまつて、猛烈にアタックしはじめたんだそうです……おまえみたいなやつがコンパニオンやつてるような女性とつきあえるわけがないつてみんな止めたんだそうですが、中佐は聞く耳を持たなくて、とうとう彼女をものにしてしまつたつて話です。バチエラーパーティーでは、みんなくやしさのあまり中佐をスラムのごみ溜めに投げこんだつて云つてました……」

つまり堅物できまじめな男が、信じられないほど美しい女性を射止めてしまつたわけである。

こういうことは一般にあまり成立しないと思われているが、しかしザックスの考えでは、男と女のいるところ、およそどんなことでも起こりうる。魅力的な美女が不健全な存在だとは限らないし、堅物のきまじめ男がいつも健全であるわけでもない。そこには人間などには永久に解明できそうにない多くの謎がある……男と女のあいだには。

一九八五年の叙勲祝賀会関連資料に、ザックスは求めていたものを見つけた。祝賀会の会計報告書には、イベントコンパニオン八名の派遣料金として、ミッドガル・プロモーションズ株式会社へ五百万ギルが支払われたことになっている。ザックスは端末に向かい、キーボードをかたかた打ちこんで、ミッドガル・プロモーションズについて検索してみた。まだ現役で商売をやっているらしい。ウェブサイトの洗練されたデザインの中に、完璧な立ち姿で笑顔を浮かべる女性たちの写真が載せられている。各種イベントへの派遣、雑誌、広告モデルなど……一流の教育を受けたコンパニオンを派遣しております……女性たちは皆非常に美しく、スタイルも抜群だった。性的というより知的で優雅な笑みを浮かべ、しかし目はどこかいたずらっぽくこちらを誘うようである。

ザックスは企業情報のページを開いてみた。代表者アレクサンドル・アナニエフ、創立一九七八年、資本金一千万ギル。ほぼミッドガル市の成立とともに創業し、二十年以上も続いていることになる。ザックスはしばし考えこむような顔をしていたが、ふいにはっとひらめいて、時計を確認し、大急ぎでデスクの上にあったメモパッドから一枚破りとり、会社の名前を書き

つける、一階の受付へ降りていった。ブルーラン嬢がまだ残っていた。

「ブルーラン様、遅くまでお疲れさまでございます。不肖ながらザックス・フェア、またも参上いたしました。あのね、ちよつと聞きたいことがあんだけど、ブルーラン様、昔イベントコンパニオンの仕事してなかったっけ？」

「どうして知ってるんですか？」

ブルーラン嬢は苦笑を浮かべた。

「神羅に採用されるまではコンパニオンをしてました……わたし、そういう話、したことありませんか？」

「直接はないけど、おれほら、飲み会大好き人間だから、いろんな話、耳に入っちゃうの。よかつたら、ちよつと教えてほしいことがあんだけど」

ザックスはメモを見せ、この会社ってどういう会社？ と訊ねた。

「ミッドガル・プロモーションズは、コンパニオンの派遣事務所としてはある意味ミッドガル一の企業です。規模はそれほど大きくはないはずなんです、高額な派遣料と、それに見合う人材をそろえているので有名で、コンパニオンたちの憧れなんです。あそこのコンパニオンは、すごくプロ意識が高くて、仕事は完璧にこなすし、ほかの事務所のコンパニオンと話もしないくらいです。手取りもすごくいいと聞いてます。神羅カンパニーのごひいき先でもありますよ。もしかして、お仕事でコンパニオンが必要なんですか？」

「うん、もしかしたらね」

「それだったら、広報課に相談したほうが早いですよ。その手の依頼は広報課が担当することが多いので、頼めば手配してくれると思います」

「ブーラン様はその事務所にいたんじゃないの？」

「ザックスは、夜八時をとうに回っているというのに、相変わらず辛抱強くさわやかな容姿を維持しているブーラン嬢を見て云った。

「だって、ブーラン様もプロ意識の塊じゃん。おれだったら絶対無理。三時間も残業させられて、疲れた顔もしないでいるなんてさ」

ブーラン嬢は微笑んだ。

「わたしもミッドガル・プロモーションズに入りたくて、ずいぶん頑張ったんです……でもあの事務所に入るのはすごく大変で、よその事務所と違って募集もめったにしないんです。したとしても、たいいてい書類で落とされて、わたしも、わたしがコンパニオンをしたときの仲間たちもそうでした。あの業界も広いようだけどせまいから、コンパニオンどうしの交流も結構あるんですけど、ミッドガル・プロモーションズの人たちは、なんていうか、一段高いところにいる、降りてこないって感じでした。どういう人が所属しているのか、どうやって選考にパスしたのか、みんな知りたくてたまらないけど、知ることができないんです。きつと事務所がそういう方針なんでしょうね。そうやって、価値をつり上げる」

ザックスはブルーラン嬢に幾重にも感謝して、六十二階へ戻った。ふたたび端末の前に座り、キーボードをかたかたやりだす。

「陸軍……ID……モロー……モ……ロ……ジョーゼフ……いたいた」

モニターに、真面目で優しそうな男の顔が映し出される。ザックスはしばしその人物の写真を眺め、経歴を読むことに集中した。

カームの出身で、父親は建築作業員。兄とふたり兄弟。両親は健在で、現在はカームに戻って元気に暮らしている。叔父に元軍人だった人がいて、中佐はその人の影響で軍人を目指すことにしたらしい。一九七六年神羅軍入隊。平均的な速度で昇進、果敢に戦果を挙げるようなタイプではないが、兵法をよく研究しており、的確な戦術を立てて任務を確実に遂行し、部下や同僚からの信頼も篤かった。まさに砲兵隊の隊長にびつたりの人物だ。最近では、神羅がつい先日苦勞して講和に持ちこんだばかりの例の北方の小国に部隊を率いて出兵し、勝利に貢献している。その恨みによる犯行の可能性は？ 考えられなくはないが、可能性は低そうだ。中佐はよく練られた作戦で、敵味方ともに人的被害を最小限に抑えている。こういう将校なら、捕虜を手荒に扱ったり、まして戦に乗じた略奪や暴力沙汰などは厳しく禁じているに違いない。中佐が敵に恨まれる可能性は低い。

ザックスはしばらく、画面の中佐の顔を見つめて考えこんだ。立派な軍人だ。こんな人がどうして死ななければならなかったのか？ 彼のような人が、よりによって任務を離れて、休暇

中の南の島で……軍人が軍人としてでなく、家族旅行の最中に暗闇で誰かに殴られて殺される。なんとなくみじめな、腹立たしい事件だ。せめて任務の最中に軍人として死んでいたら……。

ザックスはため息をつき、総務部のシステムを立ち上げて、またぶつぶつ云いはじめた。

「んーと、キ……ニ……ジと……云いにくい名前だなちくしょう……あつたあつた……キニジ村魔晄炉建設計画書、設計書、予算案……あ、これ関連性のある書類みんな一緒になつてんのか。すげーな資料係。あつたあつた、人口調査……資料室二……柵Jの九……」

ザックスは律儀に柵番号のメモをとり、資料室二へ向かった。お目当ての人口調査記録は、資料係の驚異的な整理能力により、ひと目でわかるようにファイリングされ、関連資料すべてとともにまとめられていた。

魔晄炉建設に合意した地域においては、主に手当てや補償の支払いのために、早い段階で必ず人口調査が行われる。補償といつても、もちろん一生涯を暮らせるような額など出るわけもなく、非常にささやかなものであるが、それを元手にして商売でもはじめられるだけの才覚のある人間ならば、やがて成功して新しい人生を送ることもできる。そうでない大半の人間は、無意味に故郷で嘆き暮らすか、都市へ出て労働者になる。たとえば、ドライラ・サポールのように。

キニジ村の一九七六年の人口調査記録が見つかった。魔晄炉建設の年だ。近隣の村へ移転する者の一覧、村を出る者についてはその移転先が記されている。ドライラ・サポールの名はすぐ

に見つかった。十七歳。ミッドガルへ移住。一覽を眺めていると、十四、五歳から十八歳くらいまでの少女たちが何人か、家族を残してミッドガルへ移住しているのに気がついた。数えてみると、そういうのが十名ほどいた。偶然だろうか？ おそらく違うだろう。土地を追われ、生活の手段をうばわれた田舎の若者は、都市のいい労働力になる。そういう労働者を都市の企業や工場へ仲介、斡旋するためのさまざまなネットワークは世界中にある。同胞のよしみや縁故でまかなわれる昔ながらのものから、スラムの犯罪組織が関わっているものまで様々だ。男は兵士や工場労働者や職人や、さまざまな職業への道がある。そして女には、それらのかわりに性産業が待っていることも多い。

「もしそうだとすると……やっぱスラムを当たるのが一番手つとり早いか……」
ザックスはまたもしばし考えこんだ。急にやるが増えてしまった気がした。資料室のメモパッドから紙を一枚失敬し、ザックスはこれから調査すべきことを書き出した。

A ミッドガル・プロモーションズ

デライラ・サポーはどうやってコンパニオンになった？

うちの会社との関係？

B スラムの調査（十中八九そっち系の斡旋業者が絡んでる）

業者突きとめられそう？

デライラ・サポーはどうやってスラム抜け出した？（こういう場合かなり難しいはず）

ていうかその前にデライラ・サポーの（できれば当時の）写真が必要

大事なこと！

これ全部おれがやんの？

「無理無理。明日からにしろよおつと」

ザックスは元気に云い、椅子から立ち上がった。

Libri animae ex Bliss No.2

天国に一番近い島 サンプル

2023年7月20日 初版発行

作者 マスタ

連絡先 msdbliss1997@gmail.com

FF7 S×C 二次創作サイト

Bliss

<https://bliss1997.com/>

個人的に作られた非公式ファンブックです。公式・原作の著作権保有者とは一切関係ありません。

無断転載・複製・複写・Web上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）、転売を禁じます。
